TURN JOURNAL
SPRING 2022 — ISSUE 08

—

TURNの軌跡と
そこからひろがる世界

［ターン ジャーナル］

第2部

TURNからひろがる世界

TURNのプロジェクトから受け取ったものは、人それぞれ異なる。かかわったすべての人々の「TURN」を記載したいところだが、ここでは代表して、事業の中枢を担った監修者とプロジェクトディレクターの対談、「TURN LAND」を通して施設を地域にひらく活動を展開した3名の座談会、TURNのアクセシビリティの試み、交流に携わった4名のアーティストの文章を掲載した。TURNの先に、どんな世界が見えてくるのだろうか。

「第11回 TURN〝ミーティング」での盲ろう者の森敦史との対話を契機に、日比野克彦が試みた「触画」の映像。「第12回 TURN〝ミーティング」にて紹介した。（ひみつ×ナイギャラリー作品　©Dogoart 2019・2020）

対談――TURNのターニングポイントと、未来へ受け継いでいくレガシー

日比野克彦［TURN監修者］×森司［TURNプロジェクトディレクター］

「TURNは定義されない。ささやかな活動を折り重ねるようにしながら常に動き続けていくもの」――固定されたものが何もないところから、この7年に渡る活動でどのような転機を迎え、アーティストや社会に何をもたらしたのかを振り返ってみたい。企画段階からTURNを指揮してきた日比野克彦とTURNプロジェクトディレクターの森司が、TURN立ち上げのストーリーから今後の計画までを語り合った。

聞き手＝畑まりあ［アーツカウンシル東京］
構成・文＝白坂由里

人が「生来持つ力」と「生々流転する力」をTURNと名付ける

――「東京2020オリンピック・パラリンピック」の文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトのひとつとして、2015年から7年間継続して活動してきたアートプロジェクト「TURN」が2021年度でいったん一区切りとなります。そこで、これまでを振り返って、ターニングポイントになった出来事や、どのような成果があり、これからどのような形で受け継がれていくのかといったことを語り合いたいと思います。

日比野　TURNは「東京2020オリンピック・パラリンピック」を契機にはじまりましたが、オリンピック・パラリンピックの社会的な貢献を目指したプロジェクトであったということ、そこがまず大きかったと思いますね。

森　そうですね。事業の前段として、2013年に日本財団が、京都のみずのき美術館など4つの社会福祉法人が開設した美術館での合同企画展を計画し、その企画実施アドバイザーとなった私が、日比野さんに監修者としてかかわってくれないかと声をかけました。

日比野　それから、みずのき美術館の奥山理子さん（2015～18年にTURNのコーディネーターを務めた）をはじめ4館のキュレーターたちとどんな展覧会にしようかと話し合うなかで、福祉の現場には「アール・ブリュット」という言葉だけでは表し尽くせない表現や関係性が多々あるという議論になりました。そこでまず「海からの視点」「陸から海へ」「ひとがはじめから持っている力」という言葉を引き出した。さらにそれをイメージできる言葉として「TURN」にたどりつきました。「TURN」という単語には「回転する、変化する、戻る」などというよく知られている意味に加えて、「（生まれつき持っている）性向、

気質、雰囲気、能力」という意味もあり、「これでいこう」となったわけです。

森　フランスの画家、ジャン・デュビュッフェが名付けた「アール・ブリュット」は「生の芸術」と訳されていますが、特に日本では「障害者アート」を指したり、広義でも「専門的な美術教育を受けていない人」になってしまいます。そうではなく、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超える「すべて」にかけられる言葉を時間をかけて探しましたね。

――その合同企画展が、「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」（※1）。TURNがプロジェクトとしてはじまる前年度のことですね。

日比野　この時、私は4つの施設の制作現場を見て、人間がはじめから持っている力や、その力で生きている人たちと出会った気がして、普段は感じない、新たな刺激を受けました。アーティストたちも同様に自分の力を信じて制作していますが、社会のことを気にしすぎてしまう時もあります。そんなアーティストたちがこの出会いを経験し、「施設が個性の集まりである」ということを発信すれば、施設に対する社会の見方も多様になるのではないか、と思ったのです。それで、東京芸術文化評議会で「東京2020オリンピック・パラリンピック」の文化プログラムとして提案して、「東京キャラバン」と「TURN」が、リーディングプロジェクトに決まりました。

森　具体的な活動として、アーティストと施設が交流を行う「TURN交流プログラム」と、現場での経験や気付きを紹介する場として「TURNフェス」を実施しました。2年目より「TURNセンター構想会議」を開催し、それがアーティストと施設などの文化活動を地域に開いていく「TURN LAND」へ展開しました。もともとプロジェクトメンバーの集いを念頭に置いていた「TURNミーティング」も、幅広い一般層を対象にしたものへ変容していきます。2018年には、これらの活動を図示した「TURNを創り出すプログラム相関図」（p.4参照）ができました。この相関図ができたことは、大きかったです。

そして2015年の初回から、文化交流を通じて生まれたものを発表する場として開催してきた「TURNフェス」ですが、これを展覧会の形にしなかったことも良かったと思います。そこには作品未満のものがあっても良いですし、作家と会話もできます。それは日比野さんが「六本木アートナイト2013」（※2）でアーティスティックディレクターを務めたときに、アーティストの人間力に期待し、「そこへ行けばアーティストと出会える」としたコンセプトを受け継いでいます。「TURNフェス」では「アーティストが施設に行って受け取って来たものを発表する、知っているアーティストが出るから施設のメンバーが遊びに行く」という人間関係からみんなが訪れる場所になれば良いと考えていました。

（※1）「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」
2014～15年、みずのき美術館（京都府）、鞆の津ミュージアム（広島県）、はじまりの美術館（福島県）、藻工ミュージアム（高知県）の4会場を巡回した、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展。

（※2）六本木アートナイト2013
2013年3月23日の日没前から翌24日の日の出にかけて、六本木周辺の様々な場所を会場にして行われた、オールナイト・アートイベント。日比野が、2009年より毎年開催されている同イベント初となるアーティスティックディレクターを務めた。六本木という街にアーティストたちが集い、滞在することで、その場所が持つ力を活かしたアートが創出され、またそれらを通して、夜から朝へと移ろいゆく時間が参加者間で共有されることを目指した。

また、アーティストや関係者たちが思考するなかで生まれてくる言葉を『TURN NOTE』というドキュメントに綴っていき、そこで語りきれない現象や活動を『TURN JOURNAL』という冊子をつくって記録していきました。こうして徐々にTURNの全体像が示せるようになったと思います。

日比野　TURNでは、丁寧にささやかな活動を続けて実績を積み上げ、今後につながるレガシーを残したと思います。これから文化芸術が社会にどう貢献していくか、芸術関係者も行政関係者も認識する大きな機動力になったのではないでしょうか。分かりやすい形ではなく、すぐには結果が出しにくいことだとご理解いただき、7年間継続してくださった東京都にも感謝しています。

森　計画執行型のプロジェクトだと、費用対効果云々の話になり、思い切ったプログラムが組みにくい。TURNにとって「東京2020オリンピック・パラリンピック」の文化プログラムという位置づけが、結果として良い方向に働いたと思います。

日本の伝統的な技術や作法を交流のパスポートとする「海外展開」

――小さなTURN（転換、変化）をいくつも積み重ねてきたTURNですが、なかでも大きなターニングポイントになった出来事を挙げていただけますか？

日比野　ひとつは、TURN2年目にして海外展開ができたことですね。2016年の「TURN in BRAZIL」で一番特徴的だったのは、交流する共通言語として、日本の伝統的な技術や作法を持っていく、ということでした。

森　伝統工芸的な技を通じて対話がはじまるし、手技を介して海外のアーティストも参戦できるだろう、と。そうした

「施設が個性の集まりである」ということをアーティストが発信すれば、施設に対する社会の見方も多様になるのではないかと思った
――日比野克彦

「仕掛け方のデザイン」も日比野マジックだと思います。

日比野　ブラジルに行く以前の交流は、アーティストが福祉施設に滞在し、一人ひとりの個性や他者との違いに興味を持ってそれを引き取って自分の表現をしていくというやり方でした。無理して他者に接近せず、ゆっくり時間をかけて関係性をつくりましょう、という方針で。コミュニケーション能力があり、ものをつくることを急がない、人と人とのつながりを前提とするアーティストたちに声かけをして、交流先の人との関係を築いてから、じゃあ、ちょっとこんなことやってみるか、という流れですすめていました。

しかしブラジルの交流では、関係ができるまでの時間が読めない。すぐにできるかもしれないし、全然できないかもしれない。だったら日本から来たという輪郭だけでも伝わるよう、伝統技法を携えて交流することを考えたんですね。たとえば五十嵐靖晃さん（※4）は「江戸組紐」を、瀧口幸恵さん（※4）は「きりこ」を学んで行きましたね。それ自体に美しさを備えているので、「知りたい」と思えばスッと交流に入れる。日本の文化に対する関心もある。ある意味、伝統技術はパスポートみたいなものです。

森　その後の海外展開でも、伝統技術が交流の主軸になりましたね。翌２０１７年にアルゼンチンとペルー、そして２０１８年にエクアドルと続いていきます。

日比野　日本人のみならず、世界の人たちが手癖として持っている、「こねる」とか「ひねる」とか「紡ぐ」という基本的な行為の強さにあらためて気づかされました。どこの国にも土や紙、糸があるから、必ず焼き物らしきもの、染物らしきものはあります。それをきちんと作法とし、人の行為と結びつきながら人間に携わってきた日本の伝統工芸は人に染み込む力が強い。単なる工芸品ではなく、作法や技法、自然との共生の知恵といった、考え方から趣向までがものに宿っていて、思想に近いものになっている。それを海外へ持って行くと、たとえば２０１９年の「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」では、布下翔碁さん（※5）がキルメスで交流したときの粘土細工が、失われた先住民の歴史を復活させるような哲学にまでつながったと思います。

――現地の施設などとの交流後、その成果を現地で発表する機会を設けました。「TURN in BRAZIL」では、日比野さんがアーティストの言葉を収集して壁に描き、展覧会場に集まった人たちがそれに見入っている姿が印象的でした。その後の海外展開でも、言葉を掲出するという方法を取っていますね。

日比野　アーティストがその施設で交流した「時間」というものを、どう伝えればいいのか。成果物を展示すると同時に、アーティストも来場者と一緒にワークショップをしつつ、それ以前の交流の様子を映像で振り返りながら見せるのですが、視覚にうったえる映像は状況が理解しやすい反面、鑑賞者は分かった気になってしまう。「ああ、こういう空間にこういう利用者さんがいて、こういう作業をしていたんだね」と、そこで理解が止まってしまうのだけれども、実際の交流にはもっと微妙な空気がたくさんあった。些細なことなんだけれど、なるべくアーティストたちの何げない言葉を拾い集めて、現地の言葉で書くことによって伝えたかったんですね。

森　日比野さんが、事前にアーティストたちに、日常のちょっとした気持ちの変化を書き留めておいて、とお願いしたんですよね。

日比野　たとえば「きりこ」で交流した瀧口幸恵さんは、最初かなり苦労したんですよ。「ハサミを持たせるなんて、うちの利用者にやらせるわけにはいかない」とか、受け入れてもらえない。そんな心が折れそうな雰囲気があるなかで、あるとき、ふっとTURNするような出来事が起きたのを書き留めていた。（※6）

森　交流が上手くいっても行かなくても、形として残すことのできる伝統的な技術や作法は、交流におけるある種のセーフティネットにもなっていたのかもしれないけれども、それ以上に、現地の人たちへの発信力がありましたね。

日比野　日系ブラジル3世のジュン・ナカオさん（※7）も、「もう無理、つくれない」と交流期間中に行ったオンライン会議で言ってましたね。自分は日系3世だけれど、あまりにも1世や2世のことを知らなすぎたと。日系人の方から「日本に帰りたかったのに、いろんな事情で帰れなかった」といった、ある種、悲壮感もあるライフストーリーを聞いていくと、「壮絶な人生を受け止めきれない、どう向き合っていいかわからない」という戸惑いが生まれてきたんですね。そうして苦労してきた過去を知らなかった自分が許せないというので、私も「急がなくていいから」みたいな話をして、考え直してもらったんですね。アーティストにしてみれば、現地の美術館での発表はプレッシャーもあったんだと思います。

――そこから、ジュン・ナカオさんは、自分たちの体でかたどった金網にテープを編み込むという作品を考えました。展示会場でも、来場者がさらに編み込んでいくという形で手が加えられて変化していきました。

日比野　最終的に作品という結果だけが会場に展示されるだけではなく、交流の過程の微妙な心の動きをきちんと伝えたいと思ったんですね。

森　TURNでは、大小どんなプロジェクトでも、監修者やディレクター、アーティストも参加者も、誰もがやってみないと分からない、だからやってみる、そしてじわじわとTURN（変化）が訪れるんですよね。

（※3）五十嵐靖晃
アーティスト。1978年千葉県生まれ。TURNでは2015年より「クラフト工房La Mano」と交流を重ねる。2016年の「TURN in BRAZIL」ではサンパウロにある自閉症児療育施設「ビッパ」、2017年の「TURN in BIENALSUR」ではペルー・リマの自閉症・知的障害者通所施設「セリート・アスール」で、それぞれ交流プログラムを行った。2017年からTURN LAND「手のプロジェクト」を開始。

（※4）瀧口幸恵
ワークショップファシリテーター。1990年徳島県生まれ。「TURN in BRAZIL」出発前の約1カ月間、宮城県本吉郡南三陸町に滞在し、東北の伝統的な切り紙のひとつである「きりこ」を習得。渡航後は「モンチアズール・コミュニティ協会」の知的障害者支援グループなどと、きりこのワークショップを通して交流を重ねた。

（※5）布下翔碁
やきものや漆を扱うアーティスト。1990年広島県生まれ。2019年の「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」では、「人は土から生まれ、土に還る」という考えに基づき、滞在したアルゼンチン北部のキルメスの土を採取して、日本古来の土づくりの技術を用いた作品を現地の人々と協働で制作した。

（※6）ふっとTURNするような出来事が起きたのを書き留めていた
この時の言葉が、『TURN in BRAZIL 2016 ドキュメントブック 日比野克彦とブラジルでTURNした39日間』に綴られている。

（※7）ジュン・ナカオ
マルチメディアアーティスト、デザイナー、クリエイティブ・ディレクター。「TURN in BRAZIL」では植物の皮や繊維を編み込むブラジル先住民の籠「セスタリーア」をベースに、高齢者福祉施設「憩の園」で交流を行った。

「福祉」から「文化」へのターニングポイント

――ＴＵＲＮでは「アクセシビリティ」をテーマのひとつとして打ち出していますね。

森　２０１７年の「ＴＵＲＮフェス３」で建築家の馬場正尊さん（※8）が、「知覚のライン」という会場内サインを提案してくれました。会場内の壁面を巡らせた手すりの上に、細く切った紙や編み込んだ藁（わら）、カメラのフィルムなど質感の違う素材が置かれ、それを手で触れながら展示室をまわるというもの。馬場さんご本人も緑内障を患っていて、読み上げ機能で本を読んでいるといったご経験や生活を伺ったことがあり、参加のご相談をしたわけです。そのあたりから徐々に考える機会が増えていき、ＴＵＲＮプロジェクトデザイナーのライラ・カセムさん（※9）の「経験や体験を積み重ねること自体がアクセシビリティだ」という言葉にたどり着きます。

――２０１９年の盲やろうの文化との出会いもひとつの大きなＴＵＲＮだったのではないでしょうか？

森　２０１７年の「ＴＵＲＮフェス３」で富塚絵美さん（※10）がマダム ボンジュール・ジャンジさん（※11）とつくった《光の広場》という部屋は、そのなかでは一切しゃべってはいけないというルールに従いながら、周囲の人とコミュニケーションを取るというものでした。そこでろう者の方たちが声は出さないけれどもすごく騒がしいコミュニケーションを手話でしているシーンを見たとき、障害福祉系という認識とは異なる、実際に社会に生きる障害者の文化というものにはじめて出会ったような気がした。そこで盲やろうにつながる入口を手にしたんです。

それはどういう意味かというと、２０１９年の「第７回ＴＵＲＮミーティング」には、映画監督でろう者の牧原依里さん（※12）がゲストとして登壇されました。「ろう者とは日本語とは異なる日本手話という言語を話す、言語的少数者」であるとする「ろう文化宣言」が１９９５年に出されましたが、牧原さんはその世代の方だということもあり、ろうは医学的な視点での障害者ではなくて、手話を使った共通言語を持つコミュニティなんだという考え方に立っている。そして壇上で、「聴者のあなたたちは、聞こえるという自分たちの文化をどう捉えているのか」という逆の投げかけをされたんです。一緒に登壇していたロバート キャンベルさん（※13）含め、みな面食らったような空気がありました。

日比野　ろう者にとっては、ろう文化が当たり前なんですよね。そしてそれは、聴者にはないもの。たとえば聴者だったら一人ずつしゃべらないといけないけれど、ろう者は同時にしゃべっても視覚的に分かるとか、聴者にはできないことができたりするわけです。牧原さんが監督した映画『ＬＩＳＴＥＮ リッスン』を上映して、会場から「ろう者はダンスと音楽をどう区別しているのか」という質問が出た時、彼女は「ろう者にとってはダンスも会話も音楽も同じもの」と当たり前のように答えていました。「ダンスと音楽と言語をなんで分けてるの？」と。決して分けている方が普通だなんてことはなくて、ろう文化というものがあるということをそこで知るわけです。

森　そのあたりから私のなかで、「ＴＵＲＮフェス」のつくり方をはじめとする、国内展開のアプローチを意識的に変えました。それまで我々は「ろう文化」という言葉を持っていなかった。そこから「見る、聞く、触る」というよりシンプルな単語に回帰していき、今に至ります。ＴＵＲＮにとっての「福祉」から「文化」へのターニングポイントです。「福祉」や「障害」のフェーズが、医療モデルや社会モデルを行き来するゾーンから文化ゾーンへと、明らかに変わりました。

日比野　２０２０年の「第11回ＴＵＲＮミーティング」で、盲ろう者の森敦史さん（※14）が「『触れないもの』や『体験しないこと』は、盲ろう者にとっては無いものという状態になってしまいます。逆に『触れるもの』や『体験できること』は、言葉とイメージが重なって理解していくということになります。ですから、実際に無いことは、盲ろう者にとっては本当に無い。実在しないということになります。おとぎ話のような話があったとしても、そのことは全部実際にあるというふうに認識してしまう」（『ＴＵＲＮ ＮＯＴＥ「ＴＵＲＮ」をめぐる言葉２０２０』より）と語っていたのも、それが彼にとっては当たり前のこと。彼自身は「文化」とは言っていないかもしれないけれども。

森　森敦史さんの触覚の認識の強さが、我々と全然レベルが違うんですよ。見えない人の耳の力も、聞こえない人の目の力もすごい。そうすると、「聞こえない人が聞こえるようにしましょう」「見えない人が見えるようにしましょう」という更生的なアプローチではなく、見えない人の耳の力や聞こえない人の目の力のほうにアプローチして行ったほうが一緒に楽しめるし、新しい文化がつくられるん

> 「ＴＵＲＮフェス３」で、障害福祉系という認識とは異なる、実際に社会に生きる障害者の文化というものにはじめて出会ったような気がした
>
> ――森 司

（※8）馬場正尊
建築家、オープン・エー代表取締役、公共Ｒ不動産ディレクター。１９６８年佐賀県生まれ。２００３年、「ちょっと変わった物件」を探す不動産サイト「東京Ｒ不動産」を立ち上げる。２０１６年より東北芸術工科大学教授。

（※9）ライラ・カセム
グラフィックデザイナー。東京大学先端科学技術研究センター特任助教。２０１９年よりＴＵＲＮのプロジェクトデザイナー。

（※10）富塚絵美
アートディレクター。１９８５年神奈川県生まれ。ＴＵＲＮには、開始初期の２０１５年より、「ＴＵＲＮ交流プログラム」や「ＴＵＲＮフェス」などに継続的に参加した。

（※11）マダム ボンジュール・ジャンジ
ドラァグクイーン、パフォーマー。「ＴＵＲＮフェス」のほか、大田区にある「気まぐれ八百屋だんだん」にて「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」の一環で開催している「おとな図鑑」に参加、２０２０年の「第10、11回ＴＵＲＮミーティング」では読み聞かせのパフォーマンスで登壇した。

（※12）牧原依里
映画作家。東京国際ろう映画祭実行委員会代表。２０１９年の「ＴＵＲＮフェス５」では、ろうもしくは難聴の学生を対象にした映画制作ワークショップを企画した。

（※13）ロバート キャンベル
日本文学研究者、早稲田大学特命教授。近世・近代日本文学専門。２０１９年の「第７回ＴＵＲＮミーティング」にゲストとして登壇し、牧原依里、日比野、モデレーターの渡辺祐（エディター、ライター、J-WAVE「Radio DONUTS」ナビゲーター）と共に、「多様性のある社会を考える」というテーマで鼎談（ていだん）した。

（※14）森 敦史
筑波技術大学総務課広報・情報化推進係。先天性盲ろう者として生まれる。筑波大学にて、盲ろう者の意思疎通の方法と、ＩＣＴ技術を用いた支援について研究した。２０２０年の「第11回ＴＵＲＮミーティング」にゲストとして登壇した。

じゃないかと気づき出した。それこそ日比野さんが言っていた「ひとがはじめから持っている力」にあらためて出会っていく。そんなわけで、日比野さんの「福祉施設を文化施設にする」「文化施設になろうよ」という言い方はひとつのメッセージだと思っています。型にはめて「こうじゃなきゃ」となるときついけれど、みなさん流の振る舞いで「TURN」しようとしている。

コロナ以前から「人間力」に支えられていた場だった

――2020年にはコロナの影響で複数の会場での展示が中止になりました。「TURNフェス」は「渾身の三密だったのに」と森さんが悔しがっていたのが印象的でした。

森　「TURNフェス」ではトークや上映など密になるプログラムが多く、直接顔を合わせないと会話が難しい人がいたり、いろんな人が遊びに来るし、何層ものレイヤーを1カ所でやっているから密だったわけです。本来美術館の展示は、人がいない方がかっこいいんですよ。ものがきれいに並んでいるから。でも「TURNフェス」の場合は人がいないと様にならないという真逆の構成をしなければいけない。ピラミッドの最高峰を目指す強さとは正反対の、ある種の薄志弱行、脆弱（ぜいじゃく）さも積極的に受け入れていこうと思った。それを6年かけてつくり上げてきたので、ある方法論としては完成している自信もあります。コロナ禍ではそれが使えないだけで、道半ばというわけではないです。

日比野　オリンピック延期やそれに伴う予算・規模の縮小はありましたが、2015年から施設側の立場も考慮しながらアートプロジェクトとして丁寧にやり続けてきて、オリンピックが実施された2021年にはすでにやりたいことはできていました。

森　コロナ禍の前はアーティストにその場にいてもらって、アーティストの人間力と、そこに来てくださった施設の方たちの人間力にも支えられていたと思います。そういう「場」でしかなかったとも言えますが、そういう場がこれまであまりにもなかったというのが、TURNがTURNらしいところなのかなと。そこがほかのフェスティバルと違うところのような気がします。

アートとアーティストの新しい役割を生み出した

森　これまでのアーティストのゴールが絵画や彫刻などの作品をつくることだとしたら、TURNではそれとは違うところを目指しているような気がします。アーティスト日比野が思い描く新しいアーティスト像とは？

日比野　絵画や彫刻をつくる、工芸をつくる、といった東京藝術大学の教育のあり方は何も変わらないですよ。けれどもアート活動をどう発信していくかという工夫が今までなさすぎたと思うんですね。展覧会で発表してコレクターやギャラリストや批評家の評価を受けるだけでは、大学を出てから何人の学生たちが作家活動できるか。そのような形をとらなくても、アートを一生やっていく人はたくさんいて、作家活動している人たちの眼差しでもっと広く社会的なメッセージを発信することもできるわけです。

たとえばこの夏に東京藝術大学大学美術館で開催した「SDGs×ARTs展 十七の的の素には芸術がある。」（※15）では、アートを通じて心が動くことによって、SDGsの目標のどれかに近づくという、行動変容のきっかけになる物語をつくりました。TURNも同様にひとつの物語で、「福祉現場＋アート的視点をもつ人材」を輩出する接続詞をつくっていると考えています。今の社会が互いに必要としている領域だから、そのつなぎ方をTURNを通して提案することができたと思っています。

森　TURNにかかわったアーティストたちはもともと卓越したスキルを持っているのですが、作品をつくることに向けていたエネルギーを、社会参加によって周辺の関係をデザインし直すといった、従来とは違う形で発揮できるようになったのではないでしょうか。自分たちのオリジナルの仕事は片方で持っている。その一方で、施設の人たちに会って直接的な影響も受けつつ、その施設を見ている社

（※15）SDGs×ARTs展 十七の的の素には芸術がある。2021年7～8月、東京藝術大学大学美術館で開催。日比野が監修し、東京藝術大学の学生、卒業生、教職員が参加した。教育、ジェンダー、環境などSDGsに掲げられている17の目標のなかになぜ「芸術」がないのかを問いながら、「芸術はSDGsに接続できるのか」を検討する試行錯誤のプロセスを提示した。

会の目線を察知して、そこへの問題意識がモチベーションになっているんですね。だから従来でいう、何かをしてあげるケアではなくて、その人たちが置かれている社会的な関係性を、アート活動で書き換えることができないかという振る舞いをしていると思います。

たとえば、「TURNフェス6」で、永岡大輔さん（※16）は似顔絵のプロジェクトをしていました。似顔絵を描くには人と向き合わなければいけないですよね。目を合わせて時間を過ごすという、絵を描く行為の初心をストレートに出せる感覚と、それがもたらす社会的な意義に思い至ることができる。そういう時間を用意できたことは、TURNのひとつの成果だと思っています。同じ場所にずっといるわけではなくて、行き来することによって変わっていく。アーティストたちも2、3年かけてTURNしていく感じがしますよね。

――日比野さんは、アーティストにはどのように提案をされてきたのでしょうか？

日比野　活動の成果を「TURNフェス」で発表するとか、海外展があるとか、発表の場を意識しすぎると、展示までの作業をプロセスでやるようなことになってしまう。展覧会のことは気にせず、形にならなくてもいいから交流しようと言うこともあります。一人でできる人もいますし、不安がってアドバイスを求める人もいますし。どうディレクションするかはアーティストによりますね。

森　現場でスタッフが頭を悩ませていたのは、オペレーションの困難さです。アーティストには自由に活動してもらい、施設に行く回数も任意にしていたのですが、アーティストって、自分が興味を持って関係性ができたら、自分のリズムで施設に行きはじめますよね。そうすると作家によって回数が違ってくるわけです。それも過ごし方ですし、振る舞いでもあると思うのですが、一方ではそのことが現場の苦労を生んでいました。

――TURNでは前例のないことに挑戦していますから、オペレーションはある程度幅を持てるようにしていたわけですね。

森　もちろんアーティストが一番苦労したと思います。こちらに正解があって「上手くいきましたね。正解です」と言えるわけじゃなくて、「これどうですか？」と聞かれたら「正解かもしれないですね」と言うしかない。お互いに手探りでしたから。

日比野　作家が自分の持っているものを供給するだけでなく、何かをもらって自身の作家活動に生かしていくことがなくては続かないんですよね。交流しながら気づいて自分の作品に生かしていくことも必要だと思います。

（※16）永岡大輔
アーティスト。1973年山形県生まれ。TURNでは2016年より大田区にあるコミュニティ八百屋「気まぐれ八百屋だんだん」や原宿にある渋谷区障害者福祉センター「はぁとぴあ原宿」と交流。「TURN in BIENALSUR」にも参加した。「似顔絵プロジェクト」とは、「はぁとぴあ原宿」の利用者と地域の人々がいかに出会えるかを考えるなかで生み出した企画。利用者との散歩中、利用者がすれ違う人に挨拶をしても、誰も返答してくれないことに気づいた経験がきっかけとなった。

「TURN」し続けてきた アーティスト日比野克彦

――日比野さんのそのほかの活動も「ひと」や「ひとのかかわり」をテーマとしたものが多いと思いますが、TURNと重なるところはありますか？

日比野　「他人は自分と違うものだ、分からないから不思議で面白い」という考えは昔から変わっていないと思います。たとえば1995年に東京藝術大学の日比野研究室で行った実験的な展覧会「TEST」シリーズがはじまって、「TEST1」では「自分と他人」をテーマにアートコミュニケーションやコミュニティデザインを提案しました。1999年には茨城県守谷市のアーティスト・イン・レジデンス「アーカスプロジェクト」のなかで「HIBINO HOSPITAL」（日比野美術研究室付属病院放送部）がスタートしました。個々人がインターネット上で悩みを吐露して、それに対して担当医という形で学生がやりとりして、月に一度のオフ会でものづくりをしながら交流するという内容で、今思えば、「TURN交流プログラム」のようなことをやっていました。その間に「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」（※17）に参加することになり、苗平（あさびら）という過疎化が進む集落で「明後日新聞社文化事業部」というアイデアが生まれ、集落の方たちと朝顔を育てる「明後日朝顔プロジェクト」になり、金沢・横浜など各地の「種は船プロジェクト」に派生していく。廃校を再生した苗平の拠点は今では地域交流拠点とも言えて、そこに私が通えば「TURN LAND」みたいになります。「瀬戸内国際芸術祭」で「粟島芸術家村」（※18）にアーティスト・イン・レジデンスをしに行くこともTURNとよく似ているなあと思うのです。

森　日比野さんは「TURNする」ことを前提にしている人なんですよね。言葉を使うこともあれば、得意な絵を使うこともあるし、メディア選択に関して自由度の高い人だから。そういう人でなければTURNはできなかったとも思います。

日比野　日本の地域から学ぶことも、TURNで日本の伝統技術や作法を携えて社会的課題のある海外の施設に行くのと同じなんですよね。伝統工芸の良いところは、人間が本能的にその行為や姿などに心惹かれるところ。理解するのではなく、感覚的にその良さが分かるから続いていると思うんですね。第一次産業もそんな伝統工芸と似ていて、田畑をつくる、魚を釣る、木を切るといった農業・漁業・林業の作業は、ほとんど人間の本能的な行動に近いところがあると思います。そうした作業を通じて、みなで共有できる、人がはじめから持っている力を感じられる時間があるんですよね。

「明後日朝顔全国会議」は、「TURNフェス」兼「TURNミーティング」なのかなと（笑）。大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭などはTURNの感覚に近いディレクション

（※17）大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ
新潟県越後妻有地域で3年に一度行われる芸術祭。2003年の第2回より、日比野が新潟県十日町市苗平の住民たちと朝顔を育てる「明後日朝顔プロジェクト」を開始。それに関連して、同地の廃校を本社にした「明後日新聞社文化事業部」を発足。月1回+号外の新聞発行、行事を通じた地域住民との交流などを行っている。また、育てた朝顔の種から着想を得、2010年からは「種は船プロジェクト」を始動。「TANeFUNe」と名付けた船を造船し、舞鶴をスタートして日本海沿岸を航海させ、各地を旅しながら再び舞鶴へ帰郷するまでを追うプロジェクトとして現在も継続中である。

（※18）瀬戸内国際芸術祭、粟島芸術家村
「瀬戸内国際芸術祭」は、直島、豊島、小豆島など瀬戸内海の島々を会場とし、3年ごとに開催される芸術祭。2013年よりその会場のひとつになっている「粟島芸術家村」は、2010年からはじまった三豊市の文化事業で、若手作家が現地に滞在し、地域の人々と交流しながら制作活動を行うアーティスト・イン・レジデンスの拠点である。

で、そこに観客も集まっています。こうした様々なアートフェスのなかで、TURNと似たような風景を描いているアーティストたちはたくさんいると思うのです。

定義されないTURN

――日比野さんは7年が経った今、TURNとは何かを説明するときどのような言葉で伝えていますか？

日比野　TURNという言葉をつくった時も「なんだろうね」からはじまった。交流しながらこんなことかな、とみながそれぞれ思いながらも、体験した人にはなんとなく分かります。TURNに参加した大西健太郎さん、曽根麻衣さん（※19）、岩田とも子さん（※20）などは、TURNとは何かが体に宿っているわけですよ。そういうアーティストたちが増えていきますから、そうすると世の中も「TURNってそういうことね」って分かってくると思います。説明しにくいことが、これから特に必要なんです。我々にとっては、「TURNはこれです」と言いきれないのがちょうど良いわけです。

森　TURNで新しいアーティスト像を体現した人たちが、TURNで醸成された空気に救われれば良いなと思っていますね。輪郭をつけて正体を露わにする活動をせずに、7年間多くの人の手によって活動している間にTURNというのものが形づくられてきた、というのが実態かなと思います。多様さをTURNという言葉で表現することで維持できた。

日比野　先日、ソーシャル・ネットワーキング・サービスのフェイスブック（Facebook）が、これからやりたいことを表しきれなくなって「Meta」という名前に変えましたよね。けれど、TURNはTURNでずっといられると思うんですよ。

森　TURN自身がTURNしているので、つかまえたと思ったらTURN自体が変化していってしまうから、いつまでたってもつかみどころがないものだと思います。

日比野　TURNという言葉は変わってないけれど、毎年ロゴは変えてきましたね。ひとつには決めず、色や太さなどを少しずつ変えていて、何か変化を思わせるように。

森　柔らかな変化がロゴに託せるようになりましたね。日比野さんの「出会う」とか「交流する」という言葉の意味も1年ごとに微妙に変わってきていて、それがTURNの大きな方向性のなかで機能していたように思います。

日比野　「TURNフェス」は毎回、森さんがキュレーションしていて、TURNにつかみどころがないゆえに、ひとつの共通するフォーマットとして私のステイトメントを掲出しました（※21）。そうやってロゴだったり言葉だったりを微妙に変えながらやり続けることができたのも、大きくはTURNというきちんとしたコンセプトがあったから。TURNが本当に分からないものだったら激しく変わるかもしれないですが、わりと近いところを狙って続けてきていると思います。ピタッと来ないからこそ、追いかけていられる距離感や色合いがある。大地の芸術祭関連の新聞を発行する「明後日新聞社」の基本理念である「まだ見えないけど、なんとなく見えるかな、を大切にします」「同じようなことを感じている人がどこかにいるというふうに考えたいという小さな気持ちを見つめ続けます」とも通じます。

――TURNってある意味、言葉の運動でもあったのではないでしょうか。「TURNとは何か」を定義づけないからこそ常に言葉が動いており、また受け取る人によっても解釈が全然違う。それぞれの解釈を『TURN NOTE』で拾ってきた。定義づけないことが活動の原動力にもなっていたように感じます。

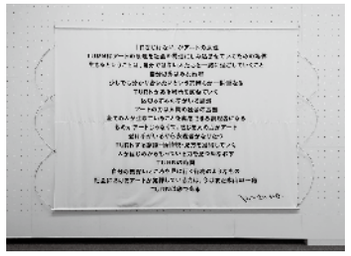
日比野　TURNって「ストップ」っていう音とは違う。「ターーーン」って、動いているし、響き合って継続していく。その言霊（ことだま）を一人ひとりが受け止めたときに、それぞれが自由に想像できる。固まりきらない力を持っているTURNだからこそ、プロジェクトを代表する言葉になり得たのだと思います。

森　定義していないから排除がなかったんですよ。ただし「なんでもアリだけどそうじゃない」という気持ちも、一方にはありましたけれども。

――それぞれ別々のTURNを感じた個人と個人が、改めて出会い、それを共有できるところに、もうひとつのTURNのプロジェクトの意義があったようにも感じます。

日比野　利用者さんもケアラーさんもアーティストもそ

> 説明しにくいことが、これから特に必要。我々にとっては、「TURNはこれです」と言いきれないのがちょうど良いわけです――日比野克彦



（※21）私のステイトメントを掲出しました「TURNフェス」で会場に掲示した日比野のステイトメント。

（※19）曽根麻衣
旅をしながら制作活動を行うアーティスト。1993年静岡県生まれ。「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」では、うちわの骨組みに、古着や古布を裂いたものを織り込む手法を用い、キルメスの人々と交流した。地元に自生する植物を使った草木染めワークショップも開催した。

（※20）岩田とも子
アーティスト。1983年神奈川県生まれ。TURNでは2017年に「TURN in BIENALSUR」に参加、アルゼンチンの知的障害者支援施設「カミノス」と交流する。帰国後、公園清掃等を行う「富士清掃サービス」や特別養護老人ホーム「グランアークみづほ」、多国籍の子供たちが通うインターナショナルな保育園「ハーモニー・プリスクール・インターナショナル」と交流を実施。「TURNフェス4〜6」にも参加した。

こにたまたま来た人も、みんな誰一人取り残されずに、自らアートに関与しているという意識が持てる。差別がない世界はなくならないかもしれない。なくならないことも受け入れながら一緒にいられる力を持つことが「ＴＵＲＮ」なので、分からなくても良いんだ、ずれていても良いんだと、それを受け入れ合う力が我々にはあるんです。

東京都と東京藝術大学に受け継がれるＴＵＲＮのレガシー

日比野　７年間で「ＴＵＲＮフェス」、「ＴＵＲＮミーティング」、「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」に参加したアーティストって80人以上でしょうか。そのなかでＴＵＲＮがなくてもやっていける人もいますし、ＴＵＲＮがあることで自分の活動を発信しやすくなった人もいます。逆にアーティストによってＴＵＲＮを広めてもらえる場合もありますよね。東京都主催としての事業体にはいったん区切りをつけたとき、この約80人以上のアーティストたちの行き先が気になるところですね。自分で羽ばたける人はいいですが、ＴＵＲＮという気流があることによって活動が継続できるアーティストに、その気流を送り続ける仕組みをつくらなきゃいけないと思っています。

森　東京都ではＴＵＲＮで育んで来たことを東京都歴史文化財団全体のなかで展開しようという動きがはじまっていて、東京藝術大学のなかでももう少し骨太な展開をしようというところで、レガシーのリレーはできているような気がします。時代の要請とマッチしているのかもしれませんね。

具体的には、ＴＵＲＮのアーティストが施設に行く「交流」と、施設を文化施設にするというイメージで動かす「ＬＡＮＤ」の部分は、名称は変わるかもしれませんが、来年も続けて数も増やせればと考えています。

もうひとつ、ＴＵＲＮで行われた「アクセシビリティ」あるいは障害特性にかかわる様々な課題的なところは、「ウェルビーイング」という大きな標榜（ひょうぼう）のもとで東京都歴史文化財団が行っているプロジェクトのなかで吸収発展させていきます。芸術文化の力や都立文化施設の資源を活用し、高齢化や共生社会など、東京の社会課題解決への貢献を目指し、高齢者・障害者・外国人・乳幼児などを対象者に「アクセシビリティの向上」と「鑑賞・創作・発表機会の拡大」に取り組むもので令和３年度より実施されています。さらに専門的に展開するために、筑波技術大学との連携もはじめています。

日比野　東京藝術大学は、第４期中期計画のなかでＴＵＲＮの展開を考えています。ＴＵＲＮの人材も輩出した「ＤＯＯＲプロジェクト（Diversity on the Arts Project）」が行われていますが、これは「アート×福祉」をテーマに「多様な人々が共生できる社会」を支える人材を育成するプロジェクトで、社会人と藝大生が一緒に「福祉と芸術」を学

んでいます。大学内でも、社会貢献とアートの関わりを考えていくなかでＴＵＲＮの認知度も上がりました。予想以上に履修希望者が多いですよ。

――ＤＯＯＲの履修生が「ＴＵＲＮフェス」のサポーターになったり、修了生が「ＴＵＲＮ交流プログラム」のコーディネートをサポートしていたりしています。ＤＯＯＲにはアートと福祉の領域をつなげたいという関心を持つ方が多いので、今後も様々な活動につながるのではないでしょうか？

森　ＤＯＯＲはＴＵＲＮに特化していないので、そのなかの何人かはＴＵＲＮをやるかもしれないですが、ＴＵＲＮの育成だけではないことがＤＯＯＲのフレーム感の広さであり、用意されていることが大きいと思いますね。ＤＯＯＲのカリキュラムのなかに地域医療などいろいろなメニューがあるなかで、その先のことに気づかせる教育内容があり、そこで学ぶことによってＴＵＲＮの次を担う人たちが出てくるような気がします。今すぐ実践者になるわけではないかもしれないけれど、ＴＵＲＮが発したものを何らかの形で受け継ぎ、展開していく人たちがそこにいると思います。

日比野　企業のなかでも福祉を考える必要性が出てきていますから、今までのように福祉科の学生たちだけがケアを勉強するのではなくて、美大・音大など芸術系の大学でも、ＴＵＲＮ的・ＤＯＯＲ的な授業が増えていくだろうと思います。すでに行われている大学とは連携して、社会的効果を実証できるリサーチやアーカイブを積み上げていくとなおさらきちんと継続でき、予算もついていくだろうと思いますね。２０１７年からは、ＡｉＳ（アーティスト・イン・そんぽの家）で、ＤＯＯＲ修了生や藝大の学生・卒業生がＳＯＭＰＯケアの運営するサービスつき高齢者向け住宅に１年間居住し、そこに暮らす人々と関係性を育みながら作品制作を行っています。

世界規模で展開する、アートを通した社会課題との向き合い方

日比野　ロンドン大学でも社会課題を扱う専門コースがつくられるなど、社会的課題をその土地の芸術大学がその土地のやり方で考えて実施していく傾向にあります。東京都と東京藝術大学だけでなく、海外の大学機関でも同じように、やっているのは心強いというか、やらなきゃという気持ちになります。

森　東京藝術大学が世界のネットワークのなかで役割の意味を確認できているということは強いことだと思います。

――社会の動向が様々に変わっていくなかで、ＴＵＲＮ

は確信に変わったという感触でしょうか。

日比野　そうですね。遡れば、２０１２年のロンドン五輪プログラム「ロンドン２０１２ カルチュラル・オリンピアード」の主軸のひとつ「アンリミテッド」（※22）が成功したことが、東京都にとって刺激になったのではないでしょうか。

森　身体障害者のオリンピックがパラリンピックなので、身体障害者の表現を「アンリミテッド」として実施したイギリスから、日本でも文化プログラムとして「アンリミテッド的なことをやりましょう」と売り込みがあったのですが、日本には日本的なことがあるんじゃないかと考えて「ＴＵＲＮ」が生まれたんです。

日比野　ロンドンでは、社会の多様性を示す文化として「アンリミテッド」が成功し、社会のなかでの認識が変わったと聞いています。それと同じようなことが、東京でも今後見られるのではないでしょうか。「アンリミテッド」は演劇や映画、アートなどエンターテインメント性が非常に高いプログラムですが、ＴＵＲＮは習慣や風習といった文化のなかの「心と心の交流」といったところで広がっていったと思います。

森　日本的なやり方で、非常に柔らかで緩やかなフレームのなかで展開してきたので、オリンピックにこだわりすぎず、もう少し広い意味での社会のありようにＴＵＲＮがコミットできたという間合いが良かったのかもしれないと思います。と同時に、オリンピックを通じて、時代が「多様性」のメッセージをたくさん聞いたことで、ＴＵＲＮが浸透しやすい、あるいはＴＵＲＮ自体の考えが共有されやすい土壌を生んだ。オリンピック・パラリンピックがなかったら、７年やったからといってこんなには形にはならなかった気がします。そういう意味ではオリンピック・パラリンピックのリーディング事業であったと言えるだろうし、ひとつの役目を担えたと総括できると思っています。

（※22）アンリミテッド
２０１２年のロンドン五輪の文化プログラムのひとつ。ブリティッシュ・カウンシルなど５団体がパートナーシップを結び、障害のあるアーティストの活動支援を目的としたプログラム。制作資金助成、専門技能育成、上演・展示機会提供、アーティストの国際進出や国際的なコラボレーションの促進などを行った。

ひびの・かつひこ

２０１５年より「ＴＵＲＮ」の監修を務める。アーティスト。１９５８年岐阜県生まれ。１９８４年東京藝術大学大学院修了。東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授。岐阜県美術館館長、熊本市現代美術館館長。１９８２年日本グラフィック展大賞受賞。１９８６年「シドニービエンナーレ」、１９９５年「ベネチアビエンナーレ」、２００３年～「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」、２０１０年～「瀬戸内国際芸術祭」に参加。２０１３～15年「六本木アートナイト」でアーティスティックディレクターを務める。平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞。日本サッカー協会社会貢献委員会委員長。

もり・つかさ

ＴＵＲＮプロジェクトディレクター。
１９６０年愛知県生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとして特定非営利活動法人等と協働したアートプロジェクトの企画運営や、人材育成・研究開発事業「Tokyo Art Research Lab」を手がける。「東京都による芸術文化を活用する被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）」、オリンピック・パラリンピックの文化プログラムの展開に向けた東京都の文化事業のディレクターを兼務。

コラム

アクセシビリティ・プログラムの試み

TURNが実験・実践の場になったもののひとつに「アクセシビリティ」がある。多彩な知覚のあり方を知り、お互いの知覚に手を伸ばし合うことのできる、新たな場の創出に向けて。

近頃、耳にする機会が増えた「アクセシビリティ」。直訳すると「近づきやすさ」「利用しやすさ」を表す英単語ですが、使用される場面に応じて異なる意味合いで使われています。

デジタルの世界では、「製品、情報やサービスなどへのアクセスのしやすさ」という意味合いを伝えているようです。高齢や障害、病気などによる運動・視聴覚機能の制約を問わず、端末を利用することができるよう、様々な機能がハード面とソフトウェアの双方において開発されています。「バリアフリー」と類似する意味で使用されることもあり、建物や乗り物などへの出入りや、移動のしやすさに向けて、物理的な整備を進めていくことを「アクセシビリティ」と呼ぶこともあります。近年では、文化事業においても、他分野との多様な結びつきや、合理的配慮（reasonable accommodation）の実施などにより、障害の有無にかかわらず、芸術体験の参加を促すアクセシビリティ・プログラムの向上に関心が高まっています。

TURNでは、2017年の「TURNフェス3」を皮切りに、「アクセシビリティ」の考え方やその方法について考察と実践を重ね、様々な企画を展開してきました。障害の有無にかかわらず、情報を入手できるよう、手話通訳やUDトーク（字幕）などの配備を拡充しました。

しかし一方で、そうした物理的な手法によって、果たして「アクセスのしやすさ」が実現した状態になるのだろうか、という問いも生まれました。「視覚障害」「聴覚障害」といった言葉ひとつを取っても、身体的な特性のグラデーションや、それぞれが生活したり活動したりするうえで求めることは一人ひとり異なります。その対応として、ある一定の障壁を緩和する物理的な手法のみならず、「自身の周辺にいる人によるフォローを増やす」という一人ひとりの行動変化が、アクセシビリティの幅を広げる手立てになるのではないかと考えました。

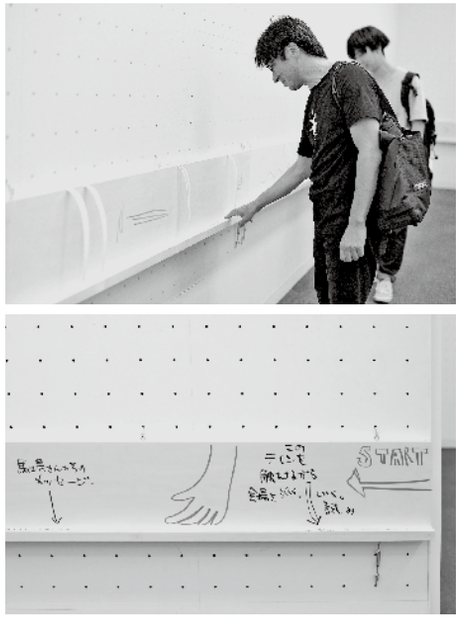
そこで、企画の内容や、そこにかかわる人たちを具体的にイメージしながら、どのような対応や環境づくりが必要なのか、当事者や多方面の専門家を交えて対話を重ねました。その結果、実に多様な考えと世界観に出会うことができたのが、このTURNのプロジェクトでした。

たとえば、視覚障害のある建築家の馬場正尊は、「TURNフェス3」会場全体の壁面に、《知覚のライン》という手すり状のサインを巡らせました。藁（わら）、布、フイルム、紙……。「何か手掛かりがあると空間を把握するときの安心感につながる」という自身の体験から着想したもので、手に触れるテクスチャーは展示室ごとに変化を持たせました。

また、2021年の「TURNフェス6：東京都美術館」では、視覚障害や聴覚障害を持つ当事者がフォローを受ける側ではなく、フォローする側として立つ「アクセシビリティ・カウンター」という企画を展開しました。健常者含め、手話や筆談での説明や、音声ガイドなどに経験値がある人が「アクセシビリティ・カウンター」の「相談員」として会場の最初のエリアで待機し、来場者の一人ひとり異なる様々な知覚と関心領域を大切にしながら、会場を楽しむ術を一緒に見つけていきました。その結果、「音で楽しみたい」「目で質感を感じたい」など、それぞれの知覚や関心の幅は様々であることを知り合う時間にもなりました。

このように、企画の実践を通して多彩な知覚のあり方に出会い、様々な姿への理解を一歩深めることができました。人の「違い」というのは、必ずしも目に見えたり、手で触れたりできるものに限りません。一人ひとりの知覚と、そこから広がる世界観にも、様々な姿が存在しています。社会における多様性への理解を深めていくためには、実験的なアクセシビリティ・プログラムの経験を重ねることが、必要不可欠なのだと感じます。

（畑まりあ）



「TURNフェス3」馬場正尊《知覚のライン》。会場内サインの新しい形の提案。進行方向に沿って様々なテクスチャーが添えられた一本のライン。展示が変わるたびに手に触れるテクスチャーも変化する。

「TURNフェス6：東京都美術館」の「アクセシビリティ・カウンター」。会場の楽しみ方について相談を受ける「相談員」が、触地図（指先で触れて読み取ることができる地図）で説明したり、筆談を行ったりしながら会場を案内した。

コラム

サポーターの声

初年度から始動し、TURNを多くの人々へ届けることを目指してきた「TURNサポーター」。2021年度までの登録数は延べ300人以上になった。活動に参加したサポーターの声を伝える。

TURNでしか味わえない感覚

和島千佳子［「TURNフェス4」サポーター］

TURNに参加すると、本当に予期せぬことが起きるんですよね。でも、危機感はなくて、あるがままを受け止めることができるんです。それはTURNでしか味わえない感覚。言葉を話すことができない人がいて、どうやってコミュニケーションを取ればいいのか分からない。でも、そこで自分のなかからもう一人の自分が立ち現れてきて、自然と手足が動いて何かしらコミュニケーションを取ろうとしている。それが、心地いいんです。この感覚は、言葉にするのが難しいんですよね。（『TURN JOURNAL 2018』「TURNフェス4サポーター座談会」より）

他者から自分を知る

佐藤卓也［TURNサポーター］

他者と触れ合うことにより他者の感覚に気づける。他者の感覚に気づいたときに自分の感覚を知るという流れを、TURNに参加すると感じる。他者から自分を知る楽しさを、ほかのサポーターと共有したい。また誰かのための他者として積極的に触れ合っていきたい。（サポーター勉強会感想より）

刷り込みから自由に

前田昌宏［TURNサポーター］

普段から社会的に刷り込まれている慣習から、もっと自由になって良いのだと思いました。ただ、社会のなかにはそれを揺り戻しにかかる罠（わな）や誘惑がたくさんあるので、TURNにかかわるみなさんと共に、楽しく軽やかにそういうものを超えていきたいと思います。（サポーター勉強会感想より）

コロナ禍でも可能な活動

滝沢智恵子［「TURNフェス6」サポーター］

およそ2年前、サポーターの集いに遊びに行って興味を持ち、「TURNフェス6」の活動にはじめて参加しました。コロナ禍で実際に集まることは難しい状況でしたが、アーティストや施設の方々はじめ、みんなが色々なことを感じ、発見したり、人とどうつながったらいいかについて、考えてつくり上げたものが会場にたくさんありました。そして以前に比べれば少しずつ人と会えるようになった、その過程も含めて、「こういう風なことができるようになるんだ」という形をこの目で見て、両方がつながった気がして、感慨深かったです。（「TURNフェス6：オンラインプログラム」TURNインタビュー「MY TURN / YOUR TURN」より）

※本誌掲載用に一部加筆・編集を加えています。

板橋区立小茂根福祉園での、『お』ダンス」のプレワークや実践の様子。［右列～中央列6枚目］『KOMONE 1/TURN』（2018年）監督：田村大、［中央列7枚目～左列］『TURNs 2016-2021』（2021年）監督：田村大

座談会――TURN LANDで得たもの、これからのこと

（写真右から）
高野賢二［クラフト工房 La Mano 施設長］
高田紀子［板橋区立小茂根福祉園職員］
新澤克憲［ハーモニー施設長］

「TURN LAND」は、福祉施設やコミュニティをLAND（島）に見立て、TURNが日常的に体感できる場をつくりだす試みとして2016年に構想され、2017年からはじまった。地域に「ひらく」をキーワードに様々なプログラムを展開してきた現場では、それぞれに試行錯誤や発見、変化を積み重ねてきた。約5年間にわたって「TURN LAND」に参加してきた3つの福祉施設の方々に座談会で話を聞いた。

聞き手＝畑まりあ［アーツカウンシル東京］
田村悠貴［特定非営利活動法人Art's Embrace］
構成・文＝中村未絵

「偶然に出会う」場をつくりたい

――お集まりいただいた3つの福祉施設は、2015年から「TURN交流プログラム」や「TURNフェス」に参加しています。その後、アーティストと参加型プログラムを行って施設を地域にひらく「TURN LAND」（以下、LAND）にも取り組んできました。あらためて、どんな思いでLAND化に協力してくださったのでしょうか。

新澤　TURNに参加したときから考えていたのは、アートを媒介に人と人が出会うような場をつくりたいということでした。ハーモニーには幻覚や妄想などの精神症状や様々な心配ごとを抱えたメンバーが30人ほどいて、2008年からは「幻聴妄想かるた」（※1）をつくっています。2014年には、かるたの展示会をエイブルアートギャラリー（※2）でやりました。

精神科領域の活動は、様々な社会的な偏見もあり、展示会のときもスタッフはおっかなびっくりでした。だけど、メンバーは意外とあっけらかんとしていて、来てくれた方を、自分の病気に関係することが書かれたかるたのところに連れて行って、「これは僕のだよ」って言う。自己紹介の名刺がわりにして、友達をつくる技を身につけていったんです。

そうやってメンバーが個別に友達をつくっていく様子がすごく面白かった。数十年間、メンバーは病院の友達、医療関係者、福祉関係者というほぼ決められたなかで生きてきて、それ以外の人と知り合うきっかけが少ないわけです。一生の友達でも大好きな本でも、多くは偶然に出会いますよね。その「偶然に出会う」可能性を自分たち支援者が潰しているのではないかと思いました。だから、とりあえず出会いの絶対量を担保したい。今まで出会う機会がなかった人と会えるような場をいっぱいつくり出したい。TURNに対する期待感はまずそこでしたし、それはLANDでも同じでした。

（※1）幻聴妄想かるた
ハーモニーのメンバーが体験した幻覚や妄想、メンバーの生活を題材につくられたかるた。ハーモニーで行われている毎週水曜日のミーティングでの話を書き留めたもので、ミーティングの記録でもある。2018年に制作されたシリーズ3作目となる「超・幻聴妄想かるた」が販売中。

（※2）エイブルアートギャラリー（A/A gallery）
2010年3月に日本で初めて障害のある作家の作品を専門に紹介・販売するギャラリーとして、アーツ千代田3331（東京都千代田区）内でスタート。2012年7月からは、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパンとエイブルアート・カンパニーが協働で運営するアートスペース。

（※3）大西健太郎
ダンサー。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了後、東京・谷中界隈を活動拠点とする。その場所・ひと・習慣の魅力と出会い「こころがおどる」ことを求め続けるパフォーマー。TURNでは2016年から小茂根福祉園との本格的な交流を開始した。

「よく分からないけど、やってみよう」

高田　小茂根福祉園は知的に障害のある方が通う福祉施設ですが、２００９年に「ＫＯＭＯＮＥＳＴ（コモネスト）」というブランドを立ち上げています。その目的のひとつは、私たちの商品にデザインを加えてオシャレにすることで、商品という媒体を通じてより社会の人たちに知ってもらいたい、ということ。障害への理解が深まり、障害のある人たちが暮らしやすくなる社会を目指しています。一方で、その活動を通して私たちの想いや活動を全国に伝えることはできたものの、逆に近所や地元の自治会等で知ってもらうことにはなかなかつながっていかない、という課題もありました。ですから、ＬＡＮＤの「地域にひらく」は、私たちの活動にすごくマッチする、と思ったのを覚えています。

とはいえ、「ＬＡＮＤをやりませんか」と言われたときは、「難しいんじゃないか」と一度保留にさせてもらったんですよね。なぜなら、職員への周知や理解してもらうことに課題を感じていたからです。「ＴＵＲＮ交流プログラム」にはすでに取り組んでいましたが、まだみんな半信半疑の部分があって。施設長も、施設主体でどこまでできるのか、誰がやるのか、ほかの業務は大丈夫なのかとか、そういう不安があったと思います。私は、施設長や同僚と、ＴＵＲＮ運営スタッフの間に挟まっている状態でした。

――そこを実行リーダー役の高田さんが粘り強く……。

高田　そうですね、粘り強く（笑）。せっかくのチャンスだしＴＵＲＮは続けたほうが良いんじゃないかと思っていました。ことあるごとに朝礼でＴＵＲＮのことを伝えたり、「見える化」したスケジュールをつくったり、月一回の職員会議でもＴＵＲＮコーナーをよく設けてもらいました。職員会議って事務的な連絡事項が多く堅い場なのですが、アーティストの大西健太郎さん（※3）に来てもらって、大西さんの口から直接話をしてもらう場をつくることもしましたね。

そういう積み重ねがあって、２０１７年３月にＴＵＲＮ交流プログラムで「みーらいらい」と「風あるき」（※4）をやった後くらいには、職員のほうから「よく分からないけど、ＬＡＮＤもやってみよう」と言ってくれるようになったんです。それは大きな変化でした。ＴＵＲＮ交流プログラムでの成果もあったし、「できない理由」が思い浮かばなくなったんだと思います。大西さんの真っすぐな心や真面目な姿勢が職員それぞれに響いたのもあると思います。あの柔らかいお人柄と施設利用者さんの雰囲気が合っていたのも大きかったですね。それで、２０１７年10月にＬＡＮＤ化が承認されました。

普段、施設の活動では、何をやるにしても企画や段取り、当日までの準備など職員がゼロベースから考えなくてはいけないことが多く、計画性をもって期日までにつくり上げることに必死なのですが、実際にＬＡＮＤをはじめてみるとアーティストさんからの提案があったり、専門性を持ったＴＵＲＮ運営スタッフの方たちが一緒に考えたりしてくださる。そういう意味では、とてもやりやすかったです。

（※4）「みーらいらい」と「風あるき」
小茂根福祉園と大西健太郎による「ＴＵＲＮ交流プログラム」内の企画。メンバーや職員の体をかたどったキラキラしたフィルム「みーらいらい」を棒にくくりつけて外を散歩する「風あるき」を、２０１７年３月末から実施した。

（※5）ＴＵＲＮセンター構想会議
「ＴＵＲＮセンター（仮称）」の設立を目指し、交流プログラムの参加施設やＴＵＲＮ事務局を中心に、２０１６年５月より話し合いをはじめた。この構想から「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」が生まれる。

（※6）深澤孝史
美術家。場や歴史、そこにかかわる人の特性に着目し、他者と共にある方法を模索するプロジェクトを全国各地で展開。２０１７年度にハーモニーとの「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」の取り組みとして、「かみまちハーモニーランド」を企画した。

（※7）「かみまちハーモニーランド」
ハーモニーとアーティスト深澤孝史による「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」の取り組みとして、２０１８年２月23日～３月３日（２月25日は休み）に開催。ハーモニーで毎週水曜に行われているミーティング「愛の予防センター」への参加体験、「幻聴妄想かるた」のかるた大会などのほか、ハーモニーのメンバーを案内人に世田谷区内を散策するプログラム「田中さんと行く池尻、宝拾いツアー」「金原さんと行く　水戸黄門殺害現場検証ツアー」などを実施した。

――高野さんはどうでしたか？

高野　クラフト工房La Mano（以下、ラマノ）は、主に知的障害のある30代の利用者さんを中心に染めや織りの製品づくり、アート活動を行っています。ボランティア活動が盛んで、染織展を年２回開催するなど、ものづくりを通して地域のみなさんとつながることを目的としてきたんですよね。だから、自分たちでも「ひらく」ことをやってきてはいた。でも、小茂根福祉園さんと同じで、ラマノの見学にいらっしゃるのは遠方の人が多くて、意外と近所に住む人には知られていなかったりするんです。

２０１６年頃、みなさんとＴＵＲＮセンター構想会議（※5）に参加していたときは、新しい拠点をつくることを前提に「どんな機能があれば利用者さんにとって良いのか」を考えましたが、答えはなかなか出ませんでした。その後、ＴＵＲＮ監修者の日比野克彦さんから、新しい拠点ではなく「それぞれの施設をＬＡＮＤ（島）に見立てて地域にひらく」という話がでたときに、「あ、それならできるかな」ってストンときたんです。

ただ、「施設を開放する」といっても何か特別な場にするのではなくて、普段やっている活動の延長線上でないと難しいと思っていました。実際にやるのはスタッフなので、忙しいところに「また、施設長が訳の分からない話をもってきた」となりかねない（笑）。現場スタッフにとっては、福祉施設としての場所と利用者さんが一番大事なので、ＬＡＮＤの目的や意義がうまく浸透しないと、「何のために？」と疑問に思う人も出てくるだろうなと思いました。

「ひらく」＝メンバーが暮らしやすくなる

――それぞれ独自の活動をされていますが、ごく身近な地域に知ってもらいたいという点では、共通する課題も感じていらしたんですね。

新澤　ハーモニーも「幻聴妄想かるた」をつくってから、日本中から激励のお手紙をいただけるようになったんですけど、やっぱり近所の人にはあまり知られていなくて。たとえば、すぐ前のマンションの人にとっては「時々大きな声が聞こえて、よく分からないところ」かもしれない。だから、ＬＡＮＤでは「メンバーが暮らしている地域の人たちとつながるには、どうしたら良いのか」という問題設定をアーティストたちに投げかけていました。

第１回目のＬＡＮＤでは、深澤孝史さん（※6）が「幻聴や妄想の背景には彼らが生き延びていくための原始の信仰にも似た思いがある」という仮説を立てて、「かみまちハーモニーランド」（※7）というイベントを開きました。来場者にハーモニーで毎週行われているミーティングに参加してもらったり、メンバーにゆかりある場所に一緒に出かけて行ったりすることからスタートしたんです。２回目に開催したのは「お金をとらない喫茶展」（※8）で「コーヒーを飲みに来ませんか」と誘われて近所の人が上がってくると、テンギョウ・

（※8）「お金をとらない喫茶展」
２０１８年度から「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」としてハーモニーで開催。アーティストやハーモニーのメンバーとともに、お茶を飲みながら一緒に絵を描いたり、メンバーが持ち寄った思い出の品について語ったりしながら、訪れた人たちと時間を過ごした。

クラさん（※9）というよく分からない人がコーヒーを出してくれる（笑）。そこで、展示してあるメンバーの「思い出の品」を見て話をしたり、絵を描いたりするという企画でした。

精神障害については全部をオープンにすれば良いというわけではないと思うんですよね。そのなかで、どうやって少しずつ「あそこはそういう場なんだ」と地域に知ってもらうのか。ハーモニーはみんなを守る場所でもあるので、「ひらく」ことで最終的に目指すのはメンバーが暮らしやすく、生きやすくなることです。

――そういった意味で、LANDによる変化はあったのでしょうか？

新澤　第一には「出会い」がありました。もともとハーモニーはお客さんがいて当たり前の場ではあるんだけど、LANDほどまとまって人が来ることはないし、高校生がいきなり上がってくることもない。「人が怖い」というメンバーも多いのだけど、そういう場だとなじめるんだなってことが分かって、「近所にお友達ができた」とか「コンビニの店員さんが、楽しかったと言ってくれた」という報告を多く聞きました。

あと、メンバーの家族に「見に来てください」と言うきっかけにもなりました。「幻聴妄想かるた」が全国紙に取り上げられると本人たちは喜ぶんですけど、親御さんからは「障害のことを表に出すなんて」と叱られたんです。「お金をとらない喫茶展」はゆるい感じなので家族からの理解が得やすかったし、実際に遊びにも来てくれました。

施設を超えたLANDでの出会い

――高野さんはLANDをはじめるときに不安はありましたか？

高野　「TURN交流プログラム」のときからずっと五十嵐靖晃さん（※10）と一緒に活動し、ラマノのことをよく理解してくださっていたので、不安はなかったですね。参加者と一から綿を育てる「手のプロジェクト」（※11）をはじめたのですが、職員目線とは違う五十嵐さんの言葉に気づかされることが多くあって、LANDをやってよかったなと思いました。

ラマノでも、染めや織りの製品づくりとは別にアート活動をやっているのですが、それでもつくりたいものをつくれば良いというわけにはいきません。かかわる人たちとの兼ね合いもあるし、できたものが利用者さんの工賃に結びつかなくてはいけない。比較的ラマノは自由なほうだとは思いますが、それでもやはり、いろいろなバランスに気をつかいます。LANDの場合はそうした必要がなく自由度がとても高いので、発想次第でどんな形にもなる面白さがありました。僕自身が一番楽しんでいたかもしれません。

ただ、そこにどう利用者さんがかかわるのかが、ずっと課題でした。1年目は週末開催にして、多くの一般参加者が来てくれたのですが、利用者さんは「なんでお休みの日にラマノに行かなきゃいけないんだろう」となってしまう（笑）。翌年から平日も開催したのですが、すべての利用者さんがかかわれるわけではなくて……。どうしようかと考えていた矢先に、新型コロナの影響でオンライン開催になってしまった。だから、利用者さんとの接点をどうつくるのかというLAND本来のところが見えないまま、今に至っています。

もちろん一般の方に、福祉施設のことや、その背景としてある利用者さんのことを知ってもらうきっかけにはなったと思いますし、TURNを通じて海外からいろいろなアーティストが来てくださって一部の利用者さんはすごく楽しんでいました。でも、すべての利用者さんに同じように楽しんでもらいたい、という気持ちもあるんですよね。

――「手のプロジェクト」には、ハーモニーの利用者さんも何人か参加されているんですよね？

新澤　そう。ラマノのファンがメンバーにいます。毎回、「手のプロジェクト」に参加するのを楽しみにしていて、いろいろ報告してくれるんですよ。綿花を育てているときに花が全然咲かなくて、それで虫がついたから殺虫剤かけたら枯れちゃった、とか（笑）。

高野　今年はオンライン開催で、最初に手にまつわるお題で参加者と雑談をしたのですが、「触れて心地が良いものは」という質問に、ハーモニーの方が「ハンバーグをこねているときの感触」と答えて「おお！」となっていました。ほかの参加者がそのあと話しやすい雰囲気になるんですよね。そんな感じで、ラマノの利用者さんも参加してくれると良いのですが。

――LANDを通じて施設同士での出会いが生まれたのは、すごくうれしいことです。

新澤　うん、良いですよね。ハーモニーの場合は全員が同じことをしないのが当たり前の場なので、LANDのときも昼寝している人もいるし、タバコを吸いに行っちゃう人もいるし、アーティストさんが遅れて来たときにはメンバーがみんな帰っていたこともありました。LANDに参加しなくても良いんだよという雰囲気を意識して担保しているところがありますね。

続けてきたなかで見えた新たな課題

――新澤さんは、LANDをやるなかで感じた課題はありますか？

新澤　うちのメンバーは単身の高齢者で、障害が比較的重い人が多くて、あまり自分のことを肯定的に思えない人たちが多いんですよ。長時間にたくさんの量を正確にこなすような、いわゆる普通の就労作業ばかりやっていると行き詰まってしまう。そういうのが苦手で、うちに来た人も多いんです。

（※9）テンギョウ・クラ
ヴァガボンド。2001年に渡米後、現在までアジア、ヨーロッパ、南米、アフリカ各国で主に教師およびフォトストーリーテラーとして活動。文化的社会的に不安定なヴァガボンド（よそ者）として一定期間ある地域に滞在し、そこで出会う他者と自らの日常に揺らぎをつくり出すカルチャーダイブを実践、人と人の間に生きる在り方を模索している。

（※10）五十嵐靖晃
人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。これまでのプロジェクトで、2005年にヨットで日本からミクロネシアまで約4000㎞、2012年に日本海沿岸をたどる約970㎞の航海を経験。「海からの視座」を活動の根底とする。

（※11）「手のプロジェクト」
ラマノと五十嵐靖晃による「TURN LAND」の取り組みとして、2018年春より「手のプロジェクト―綿花から糸へ…―」を開催。「手」にまつわる行為や所作、表現に着目し、様々な人たちと一緒に一から畑を耕し、綿づくりを行った。2020年度からは、新型コロナの影響を受けてオンラインでつながる「テレ手のプロジェクト」を実施。参加者が同じ日の同じ時間に種をまき、それぞれの家で綿を育てることを通して季節の移り変わりに触れる時間を共有した。

だから、そういう価値観とはまったく別の軸をつくろうね、ということを昔から言ってきました。たとえば「幻聴妄想かるた」には、一番できない人が逆にすごく人気者になるような「ひっくり返す作用」がある。だから、ＬＡＮＤでアートを活動に取り入れること自体には抵抗はありませんでした。

ただ、段々とＬＡＮＤが楽しくなって頑張りすぎると、義務的というか目的化してしまうんですよね。メンバーもアーティストも頑張りたいからどんどんやるんだけど、そうするとなんか就労作業より大変になっちゃう。「いつまでにこれをやって、ＴＵＲＮ運営スタッフにこの資料を出さなきゃ」と苦しくなってきた部分もありました。

今は、もっとゆるく、表現を楽しんで、今までの価値をひっくり返すような、そういう本来の「アート」の姿に立ち返るにはどうしたら良いかな、と考えています。

高田　「アート」で言うと、小茂根福祉園では２００９年から講師を招いて「アトリエ」という活動をしているのですが、最初の目的は「開放する場であってほしい」だったんです。もちろん、利用者さんは毎日の生活、環境のなかでリラックスしている時間が多いと思いますが、少なからずストレスもある。アトリエの時間は「～しなきゃいけない」ではなく、「好きなことをして良い、自由で良い」とする、講師と職員との間での共通認識がありました。でも実際にはそうもいかなくて、「アトリエ＝絵を描く」になり、作品展や商品のデザインの「ために」絵を描く時間というのが出来てしまったんですよね。

その点、ＬＡＮＤは「アーティストさんと遊べる！」みたいな感覚で、利用者さんにとってすごく楽しい場だったと思います。ＬＡＮＤには期限とか内容の「しばり」がほとんどなく、誰かの目を気にする必要もないですから。細かい作業が苦手な人もＴＵＲＮでは活躍できて、プロのカメラマンにかっこよく撮ってもらえて、自分にスポットライトがあたる。利用者さんにとって、ＬＡＮＤがそんな風に開放される場であったら良いなと思っています。

ただ最近は、「こういう風に表現しなきゃいけない」みたいな気持ちが、もしかして出てきちゃっていないかな、という不安もあるんです。大西さんとダンス（※12）をしているときに、「盛り上げなきゃ」っていう気持ちが利用者さんに生まれていたとしたら、「それでいいのかな、アートなのかな？」と思ったり……。すごく難しいんですけど。

大きくなっていたＴＵＲＮの存在

――最後に、ＬＡＮＤを含むＴＵＲＮのプログラムをやってきての「これから」についてはどうでしょうか？

新澤　ＴＵＲＮでいろいろなことをやってきて、スタッフの成長もありました。今「そもそもアートって何だろうね」という問いが出てきているのですが、それは、自分たちの求める水準が上がってきたということかもしれません。ハーモニーにとってＬＡＮＤは大事な文化のひとつになったと思うし、これからも機会があれば続けていきたいです。

（※12）大西健太郎とダンス
２０１７年度から小茂根福祉園では大西健太郎と『お』ダンス」プロジェクトを展開。言葉を交わさずに向き合った二人が「手の会話」を行い、その様子を周りから見つめるほかの参加者が、心動かされる動きや表情を見つけたときに「お」というかけ声を投げかけるというもの。「手の会話」をする二人を「ダンサー」、周りの参加者を「『お』ダンサー」と呼ぶ。

高野　ＴＵＲＮを経験したことで、自分たちで何かイベントをしたいと思ったときにも、規模感や費用、どういう段取りならできるのかということが考えやすくなりました。それは今後の財産になると思っています。

これまでは日々の作業が忙しくて活動を発信しきれていなかったのですが、ＴＵＲＮをきっかけに地域のカメラマンさんに入ってもらうようにしたんです。みんなの生き生きとした写真を撮ってくださる方で、ＴＵＲＮの活動以外でも撮影をお願いするようになっていて、新しいウェブサイトにも使っています。これもＴＵＲＮでの経験から発信の必要性というのを感じたからで、新しい一歩を踏み出すきっかけになりました。

高田　小茂根福祉園ではＬＡＮＤが一区切りするにあたって、この活動を継続するかどうかを施設長はじめみんなで検討しようとしています。利用者さんにとってどんなメリットがあるのか、それに対して職員はどうしたいのか、こういったことに職員一人ひとりが向き合う必要があります。ただ、これまでの大西さんや宮田篤さん（※13）とのかかわりが、利用者さんにとって豊かな時間であったことは事実です。それを証明する一例として、利用者さんが掲げる1年の目標や希望に、「ＴＵＲＮをやりたい」ということを挙げる人が出てきているんですよね。職員もみな、利用者さんの良い変化や手応えを感じていると思います。福祉施設の職員が他業種の方々とかかわれることも有難いです。何年も続けてきて、みんなのなかにＴＵＲＮの存在があることを、実感しているところです。

（※13）宮田篤
美術家。ワークショップやドローイングによって、他者とのかかわりのなかにある差異を見つめることを制作の契機にしている。小茂根福祉園とは、ＬＡＮＤ化のタイミングで交流を開始。大西と共に『お』ダンス」などのプロジェクトに参加した。

しんざわ・かつのり
精神保健福祉士、介護福祉士。東京学芸大学教育学部卒業後、デイケアの職員や塾講師、職業能力開発センターでの木工修行を経て１９９５年共同作業所ハーモニー（現在は就労継続支援Ｂ型事業所）開設と同時に施設長。アウトサイダーフォーク・バンク・バンド「ラブ・エロ・ピース」のギター担当。

就労継続支援Ｂ型事業所　ハーモニー
特定非営利活動法人やっとこが運営する就労継続支援Ｂ型事業所。統合失調症や躁鬱病、パーソナリティ障害、発達障害などを抱える30人ほどのメンバーが登録。リサイクルショップの運営や公園清掃をはじめとする就労作業のほか、趣味の活動など思い思いに過ごせる場所を提供。メンバーの体験をもとにした「幻聴妄想かるた」を発売。ＴＵＲＮには初年度の２０１５年より「ＴＵＲＮ交流プログラム」に参加。２０１７年度より「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」を実施。

池上福祉園での、粘土を握ってひらくワークショップ。「TURN LAND」気まぐれ八百屋だんだん「クイズ！つつむんば～『ひらく』ための『つつむ』ってなーんだ？～」のクイズ映像（2021年）撮影：ラルフ・シュピーラー

—

たかだ・のりこ

就労継続支援B型サービス所属、サービス管理責任者。社会福祉士、介護福祉士。小茂根福祉園表現活動推進委員として、TURNの実行リーダー役を担う。2005年、小茂根福祉園入職。ものづくりブランドのKOMONESTやアート活動にかかわりながら、障害者のサポートを行っている。

—

板橋区立小茂根福祉園

1982年に東京都板橋区から管理運営委託を受けて開設。社会福祉法人恩賜財団東京同胞援護会が運営している。生活介護サービスでは、日常の介護を行うとともに、創作活動や体の取り組み（PT訓練）、社会活動や行事を実施。就労継続支援B型サービスでは、「働く」という作業支援を中心に、生活支援、社会活動、行事を行っている。アトリエ活動では、イラストやアート制作を行い、豊かな感性や、自由な発想で自分らしい表現が生まれる場を創出している。TURNには初年度の2015年より「TURN交流プログラム」に参加。2017年度より「TURN LAND」を実施。

—

たかの・けんじ

クラフト工房La Mano（ラマノ）施設長。学生時代に染色を学び、2000年にラマノに入社。町田市にある築120年の民家で、障害のある人とともにものづくりに励むとともに、物をつくるための場づくりを考えている。

—

クラフト工房La Mano（ラマノ）

東京都町田市。1992年に心身に障害をもつ人が働く場として設立。「ラマノ」はスペイン語で「手」を意味し、「ものづくりや手仕事で社会とつながる」をモットーに、天然素材を使った染め、織りの製品をつくっている。また、アトリエ活動としてアート作品の制作やグッズづくりを行うほか、一般の人が参加できるワークショップなども実施。豊かな自然に囲まれた環境で、築120年の古民家の母屋を中心に、メンバーと職員、地域ボランティアスタッフが協力し合い活動を行っている。TURNには初年度の2015年より「TURN交流プログラム」に参加。2017年度より「TURN LAND」を実施。

表現としての手話と「協働」の可能性
――「オンラインTURNミーティング」の制作現場が教えてくれたこと

畑まりあ［アーツカウンシル東京］

―コロナ禍を機に始まった、オンラインによる「TURNミーティング」では、アクセシビリティの新しい試みとして「ろう通訳」を導入した。そこで直面した数々の課題と、乗り越え方から見えてきた、異なる人と人との協働の意味とは？

――

アナログからデジタル手話通訳へ

先日、あるニュースが目に留まった。「北京冬季五輪でAI手話アナがデビュー」。2022年の北京冬季オリンピック・パラリンピックに向け、AIを活用した手話アナウンサーが登場するという。音声識別や自然言語理解などのテクノロジーが搭載され、中国の「国家通用手話辞典」の基準と、長時間のスマート学習により、視聴者に専門的で正確な手話解説を提供できるよう設計されている。

日本では、ついこの夏、東京2020オリンピック競技大会の開幕式で、手話通訳がつけられていなかったことに批判の声が挙がり、全日本ろうあ連盟や聴覚障害者らの団体、手話推進議員連盟などが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、NHK、民放連などに改善を求めた結果、「ろう通訳」が閉会式でつけられることになった。また、一部の試合では、NHKが推進してきた「手話CG実況」が実況やルール解説に用いられた。コンピューターグラフィックス（CG）による手話のアニメーション（手話CG）を自動生成する技術開発として、手話の単語一つ一つについて、実際の手話の動きをモーションキャプチャー技術で取り込み、約7000語の手話単語がCG化されたという。

「人」が担ってきた手話通訳が、テクノロジーへ移管されていく。果たして、これまで行われてきたことが、全て移管しうるのだろうか。世界的な競技大会を契機に、放送サービスの拡充が進み、手話通訳はアナログからデジタルへの過渡期といえるだろう。

人と人とが理解し合える通訳とは？

そのような社会動向の中で、TURNが取り組んできたのが、「オンラインTURNミーティング」（※1）での「ろう通訳」である。「ろう通訳」をオンライン上でリアルタイムに発信することに初めて挑戦するチームと、コロナ禍を機に2020年から実践を始めた。その制作現場は、取り組む中で見えてきた課題と議論の往還の場となり、不都合やエラーに悩みながら試行錯誤を重ねることとなった。それは、手話がコミュニケーションのためのツールではなく、一つの言語であり、豊かな表現を内在し、独自の文化を常に生成し続けていることに、何度も気付かされたからだ。ただ、それ以上

（※1）TURNミーティング
2017年より、年に数回開催しているトークプログラム。毎回異なるテーマのもと、TURNのプロジェクトメンバーや多方面からの専門家をゲストに、TURNの可能性について語り合う。

に、ろう者と聴者の制作現場における異なる言語・文化・価値観を携える人たちとの協働であったからこそ、互いを理解するためにどう手を伸ばし合ったらいいか、人と人の普遍的な理解の関係について根底から考えさせられたからでもあった。齟齬の要因を突き詰めていくと、ろう者と聴者の違いを前提にすることで理解し合える糸口が見つかると感じる時もあれば、考え方の違いが根底にあると感じる時もあり、その理由は一様ではなかった。

「AI手話」の通訳現場では、常に最適化が提示されているとしたら、こうした不都合やエラーは生じないだろう。既にインプットされた方式による組み合わせであるとすれば、0から1にする形で新たな方式を生み出すことも難しい。一方で、どんなに多くのデータや組み合わせがインプットされていたとしても、異なる人たちが出会う現場で起こる、無限の偶然性や異和の解消には、対応しきれないだろう。また、無限の偶然性に対応しようとすることで生み出されるアイデアとも出会えないだろう。「オンラインTURNミーティング」の「ろう通訳」の取り組みは、多くの困難に直面しながらも、システムに還元しきれない、人と人とのあいだに生じる理解へのヒントを与えてくれた。

TURN監修者の日比野克彦は、TURNでやりたいことの一つとして「モノをつくることの意味や、人を人たらしめているものとは何かということも考えていきたい。人工知能の発達で人間の仕事が奪われると言われたり、物理的な世界ではなくヴァーチャルな世界が拡張している現代において、社会のなかの芸術の役割はそこにあるのではないかとも思っています」と2020年に語っている(*①)。TURNでは、アーティストとの交流の現場のみならず、多様な人たちと実験的に取り組んだ制作現場でも、「人を人たらしめる」ことのヒントを感じられる時間が豊かに育まれ、TURNしている瞬間に立ち会えたことを少し書き留めておきたい。

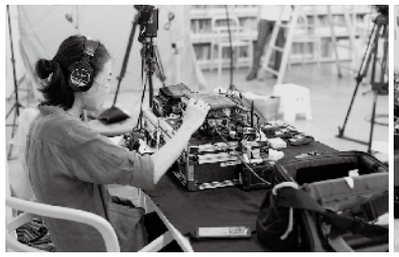
「ろう通訳」を導入した経緯

2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の感染防止対策を講じながら事業を実施する年となった。その対応に伴い、これまで会場に人が集う形で開催していた「TURNミーティング」もオンラインで開催することとし、生配信における「アクセシビリティ(※2)」の導入について、どのような方法を取るか、配信テクニカルテームと相談することから始めた。

音声ガイドの導入のほか、手話通訳者へのヒアリングを通して、手話通訳者が「ワイプ」で登場し、その際、画面の状況に応じてワイプを左右に移動したり、字幕の位置やサイズを変えられる、柔軟な対応が可能となるフォーマット作りに努めた。さらに、トークの合間に行うパフォーマンスへの手話通訳の導入を検討する際に、「ろう通訳」をいれようという案が挙がった。

「ろう通訳」とは、①聴者の手話通訳者(フィーダー)(※3)が音声情報を手話で伝え、②ろうの通訳者がより分かりやすいネイティブ的な手話表現に翻訳する、というリレー方式の

(※2) アクセシビリティ
TURNでは、2017年より「アクセシビリティ」をテーマに取り組むプログラムを展開(詳細は p.96-97 参照)。



←配信テクニカルチーム。「TURNミーティング」生配信に向けて、コンテンツ制作の技術面を担う。

通訳方法である。

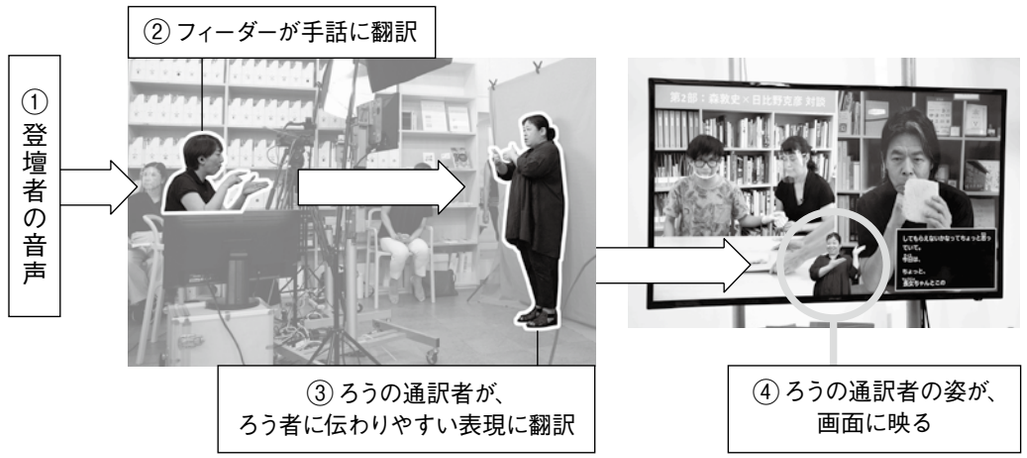
ろう者の表情は、細やかな質感も表現することができ、例えば「『波が打ち寄せていました』という言葉についても、ろう者が表現する波って、繊細な波の動きやダイナミックな波まで、まるで波と同化しているかのような表現が目の前で起こる感じ」だと手話通訳者の瀬戸口裕子は語っている(*②)。こうした表現の豊かさを「TURNミーティング」の視聴者とも共有していくために、ろう通訳を導入した。結果、配信画面に登場する、2名のろう者の手話通訳者と、2名のフィーダー、あわせて4名の体制で、全体を通して手話通訳を実践することになった(図参照)。

課題① 相手の視点に立って初めて分かること

この「オンラインTURNミーティング」の制作の現場は、様々な難しさに直面していく。

まず、台本の存在である。テレビ番組的な、スムーズなカメラワークに長けている配信テクニカルチームは、躍動感のある制作を得意とし、登壇者の様子を綺麗に伝えてくれる。それを実現するには、カメラマン、音声スタッフ、オペレーターや演出ディレクターなど、異なる専門家が一同に動けるよう、詳細な進行と人の動きを可視化した台本が必要となる。さらに今回は、通常の台本に加え、音声ガイドや手話通訳者の動きも必要となる。関係者が増え、台本が複雑になっていくとともに、そこに書かれたことを配信テクニカルチームに

「オンラインTURNミーティング」の手話通訳体制



(※3) フィーダー
聴者の手話通訳者で、音声言語で発せられている内容を、ろう者の通訳者に伝える役割を担う。

読み込んでもらうためには、ろう者の習慣や背景をあわせて伝える必要があった。「〜のシーンは、ワイプを下げてほしい。なぜなら、ろう者は〜に慣れていて、そこにあると情報過多になり、そもそも何を伝えたいかが分からなくなる」。ろう者は普段どのようにモノを見ていて、何を読み取り理解するのか、といったことに想像力を働かせないと、ろう者の視聴者に伝えるために必要な場面転換や画面構成の意図が、配信テクニカルチームに理解されにくい。

また、当日いざ現場に立つと、手話通訳チームにとって、適切な機材やその配置、また画面の切り替えのタイミングなど、様々な懸念が見えてきて、調整が必要になった。手話通訳チームの混乱は、テクニカルチームの混乱へとつながる。テクニカルチームは最善を尽くし、複雑な配線による体制を既に作り上げており、当日の手話通訳者チームからの変更依頼を受けるのは難しく、そう簡単には対応できない。

プログラムを企画し、ゲストや手話通訳者との相談から、配信や情報支援のオペレーションの調整までの対応を担ってきた私は、ろう者と聴者が普段捉えている世界そのものが異なり、その差異を理解した上での制作の必要性を痛感した。例えば、ろう通訳者が、手話の見え方にこだわるのは、美的な問題ではなく、言語を心地よく受け取ってもらえれば、結果、より深い豊かな内容が視聴者に伝わるからだ。手話通訳者も配信テクニカルチームも、より良く伝えていきたいという思いは同じであるものの、それぞれが想像していなかった視点や大切にしたいところが見えてきて、互いの通例ではスムーズにことが運ばない事態を経験した。それぞれが見ている世界はこんなにも異なることを実感する。

課題②「音楽」をどのように感じるか

次に議論することになったのは、「音楽」にまつわる考え方である。2回目の「オンラインTURNミーティング」では、ラッパーのマチーデフ（※4）によるパフォーマンスを披露することになった。その音楽をどのように、ろう通訳で表していくのか、マチーデフも交えて手話通訳チームと打ち合わせを行い、話し合った。

そもそも「音楽」における体験や実感は、ろう者と聴者の間で異なる。そのことから思考を始めなければ、ろう者にとって実態のない聴者の音楽を、ろう者に押し付けてしまうことになる。そこで、マチーデフにとってのラップや音楽はどのようなものか。リズムとはどのようなもので、その魅力は何か。ろう者の世界で類似する事柄を出し合いながら、お互いの知っていること／知らないことを共有し合った。例えば、リズムに関して「ろう文化」では、「手話ポエム」という表現が存在する。聴覚障害児教育・聴覚障害者支援関連を研究する金澤貴之は手話ポエムについて以下のように説明している（*③）。

—

芸術表現として、手話ポエム（手話歌）、演劇、手話文学も生まれている。これらの芸術性は、内容そのものだけでなく、手話によって語られる中に表れてくる。手話ポエム

（※4）マチーデフ
ラッパー、作詞家、ラップ講師。2019年より「TURN交流プログラム」に参加。2020年にオンラインで開催された「第12回TURNミーティング」にて、ラップパフォーマンスを披露した。

←マチーデフのパフォーマンス。配信画面には歌詞のほか、ビートのグラデーションを視覚的に表示したり、グラフィックモーションを導入したり、映像的な実験も行った。

や手話歌と言われるものは、音や音楽を伴わず、ろう者のリズムで手話が繰り出され、手の動きで「韻」が踏まれる。

—

ここでいう「リズム」や「韻（いん）」の心地良さも、聴者がイメージする感覚とは異なるだろう。ろう者にとって、他者の手話を見ていて、心地良いと感じるのは「イメージが広がる」時であるという。手話通訳チームとマチーデフとの長時間に及ぶ議論の末、今回のパフォーマンスには手話通訳をいれないという判断に至った。ろう者と「音楽」の関係性を提示するには慎重さを要したことが理由の一つであるが、そこには歴史的な要因も紐づいている。弁護士の藤木和子は、耳の聞こえない弟とともに育った経験をもとに、聴覚障害や手話などを専門に活動しているが、「音楽」との関係について、次のように言及している（*④）。

—

私自身は舞台手話通訳で歌詞を通訳した経験がありますが（声は出さず、手話のみ）、音楽や歌と手話の関係については様々なスタンスの方がいて、これまたチョー難しい‼です。

私の弟を含む、周囲の聞こえない・聞こえにくい人の中には、音楽が好きな人もいますが、音楽の授業や発音練習で苦しい思いをした人もたくさんいます。大人になってから自分の言葉である手話に出会い、声を捨てた人もいます。そう考えると、聴者が歌を歌いながら手話をする手話歌、声付き手話での「皆さん、こんにちは！　私は○○○○です。よろしくお願いします！」といった挨拶等は、有名人や政治家の方々が手話に関心を持ってくださることが嬉しい半面、自分の大切な言語を傷付けられたと感じるろう者、手話関係者もいます。

—

ろう者のコミュニティにおいて、「音楽」への眼差しは、それぞれが生きた環境や出会い方によって大きく異なり、文化や歴史的な視座が関わる。そうした事柄が、「音楽」の背景に横たわっていることを理解しない限り、知らず知らずのうちにコミュニケーションを分断してしまう。

課題③ タイムラグ、通訳者の混乱

さらなる難しさとして挙げられるのは、時間と手話通訳者としての立場である。ろう通訳は、フィーダーから情報を受け取ってから、ろう者の表現に変換して通訳を行うため、登壇者の発言のタイミングと、ろう通訳のタイミングにはタイムラグが生まれてしまう。また、ろう通訳者に伝わってくる情報が、アートや表現など抽象的な事柄であると、通訳者は混乱してしまう傾向にある。具体性が欠けていてイメージがしづらいと、それをどのような形や動きに翻訳して通訳したら良いかの判断が困難になる。たとえ、手話通訳者の問題ではなく、話されている内容の性質による通訳の困難さであっても、視聴者はそのことを知り得る術がないため、手話通訳者の通訳スキルの問題だと思ってしまう。

事前に決めすぎない、という工夫

これらの困難や課題に出会い、制作プロセスの中で議論を重ねると、様々な発想の転換（ＴＵＲＮ）にも出会うこととなった。

例えば、２０２０年11月に実施した2回目の「オンラインＴＵＲＮミーティング」後の会議では、配信テクニカルチームから、「もう台本を前提にするのはやめよう」という声が挙がる。これまで台本ありきで動いてきたチームからすると、大きな変革であろう。目の前にある複雑な現場に対応することを考え直した結果、これまでの方法を一度解体するという提案だった。

これは、アーティストがＴＵＲＮの活動で様々なことに出会っていく中で生じる変化にも類似する。例えば、アルゼンチンのアーティスト、アレハンドラ・ミスライ（※5）が、２０１７年にＴＵＲＮに参加することになった時のこと。アレハンドラは、ブエノスアイレスにある、自閉症児者を対象とした造形教室で交流プログラムを行うことになり、日本にいる運営チームとメールでのやり取りを重ねながら、事前準備を行っていた。

初めて、障害者支援の現場に関わることになったアレハンドラは、どのように交流を行ったら良いか、イメージを膨らませつつ、日ごとの綿密なワークショップの企画書を提出してくれた。一方で、こちらからアレハンドラへ投げかけたことは、「あまり何をするか決め過ぎず、まずはそこにいる人たちと出会ってほしい」ということ。アレハンドラからは「なぜか分からない。どういう意味か」という趣旨の返事があり、困惑した様子だった。

交流の初日を迎えた後、アレハンドラから届いた連絡は、初めての経験における喜びと、「事前に決めすぎないで」という意味が分かったという内容だった。実際に、交流を始めてみると、事前に設計していた通りにはことは進まない。アレハンドラが教室の子供たちに「～を作ってみて」と言っても、同じような形にはならず、想定していなかった反応ばかり。そうした状況と出会ったアレハンドラは、まずは、そこにいる一人ひとりの特性を見つめてみよう、そこから何をするか考えようという思いに至ったという。

ワークショップに関わる人との交流をイメージして、緻密に準備された、アレハンドラにとっての企画書は、「ＴＵＲＮミーティング」における台本に読み替えることができる。これまでの既存のやり方を解体し、異なる感覚とコミュニケーションをする人たちとの交流の仕方を見出した瞬間だったのかもしれない。

中断を良しとする発想の転換

手話通訳のタイムラグや、内容の分からなさによって通訳が追いつかない課題については、「その事態に遭遇した時に、登壇者に一度会話を中断していただき、改めて話してもらう」という方法を考えた。コミュニケーションというのは、完璧に伝わることの方が珍しく、齟齬（そご）の連続であるともいえるだ

（※5）アレハンドラ・ミスライ　アーティスト。アルゼンチン出身。２０１７年に「TURN in BIENALSUR」（アルゼンチン）に参加し、長年研究している「ランダ（レース編み）」の技術を用いて、自閉症児者を対象とした造形教室であるプリンカールに通い、「ＴＵＲＮ交流プログラム」を実施。また、２０１８年の「ＴＵＲＮフェス4」と、２０１９年の「TURN in TUCUMAN, BIENALSUR」（アルゼンチン）に参加。

ろう。そこで手話通訳者もその場を構成する一員として、「分からない時には手を挙げて教えてもらう」ということを実践してみたのが、２０２１年８月の「第14回ＴＵＲＮミーティング」の場であった。通常、トークイベントは、スムーズに進行することが想定され、会話を途中で中断することはないが、中断を良しとする発想の転換である。

これまでの「ＴＵＲＮミーティング」のろう通訳に取り組んできた手話通訳者をゲストに招き、ろう者と聴者が同じ舞台に立ち、「ＴＵＲＮミーティング」の現場における難しさや良かったことを率直に話す場を設けた（※6）。この日、終了後の手話通訳者たちの晴れ晴れとした表情が印象的だった。これまで、様々な手話通訳の現場で多くの困難に遭遇してきたが、それをパブリックな場で共有できる機会はなかったという。

「異なる文化」を超えた協働

先述した金澤貴之は「ろう文化」における説明とともに、ろう者の様々なマイノリティ性を示唆している（＊⑤）。

―

[…]「ろう文化」は、聴者の知らないところ（しかし実はあちらこちら）に満ちあふれている。そして重要なのは、聴者はろうコミュニティに入ろうとすることで初めて、ろう文化を知らない聴者ならではの失敗をしてしまったり、失礼な行為をろう者から大目に見てもらったりといった経験ができることである。

逆に言えば、そうした経験を積むことが無ければ、いかに普段、ろう者が聴者文化に合わせているのか実感をもって理解することができない。

手話は長い歴史の中で劣ったものとみなされ、また、手話を使うろう者のやり方もまた、「社会常識がない」ふるまいと見なされてきた。それは、手話を読み取れない聴者による手話に対する誤解、偏見によるものであると同時に、ろうコミュニティの外部にいる聴者による、ろう文化への誤解、偏見によるものでもあった。

―

「ＴＵＲＮミーティング」の制作の現場においては、多くの難しさに出会い、挑戦しながらも、実践を終えた後にも反省や指摘の多いものとなった。たくさんのコミュニケーションを重ねた上でも、そもそもの試みの必然性や意義についての疑問が湧いてくる。それでも、「何かを一緒に創出することができるのではないか」という思いがあり、その思いを共有し合えたからこそ、困難に直面しても、活動を共に続けられてきたように思う。

ろう者と聴者の協働の現場の在り方、また異なる知見や価値観を持つ人たちとの協働は、探求の一途にある。さらに、冒頭で記した「手話ＡＩ」という新しいテクノロジーの存在は、人と人の協働の意義すら問いかけてくる。それがまさにテクノロジーとの大事な付き合い方の糸口のようにも思う。

（※6）第14回ＴＵＲＮミーティング　２０２１年８月、「コミュニケーションの難しさ」をテーマに、第1部では「オンライン生配信における課題と可能性」と題し、ＴＵＲＮの現場で手話通訳を担当してきた、石川絵理（特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク事務局長、ダイアログ・イン・サイレンス アテンド）、佐沢静枝（特定非営利活動法人しゅわえもん、立教大学日本手話兼任講師）、瀬戸口裕子（手話通訳士、アート・コミュニケータ）をゲストに招いて語り合った。

どちらが良い悪いではなく、テクノロジーが成しえることを通して、人だからこそ成しえる大切な何かを見出すことができるのではないかと思う。

参考文献

—

（＊①）「巻頭対談 3万年前、海を越えた人間に学ぶ。『違い』でつながること」『TURN JOURNAL SPRING 2020 — ISSUE 03』p.5

（＊②）「手話と時間 —ゆらぎの共有—」『TURN JOURNAL WINTER 2020 — ISSUE 06』p.9

（＊③）と（＊⑤）金澤貴之「日本にあるもう1つの言語 —日本手話とろう文化」「SYNODOS」2015年2月17日（https://synodos.jp/opinion/education/12917/）（2021年12月1日閲覧）

（＊④）藤木和子「五輪開会式中継で忘れられた手話通訳～取り残される人を減らすため一緒に考えて！ 多様性と調和は『チョー難しい!!』」「論座」2021年8月24日（https://webronza.asahi.com/national/articles/2021082300007.html）（2021年12月1日閲覧）

—

はた・まりあ

—

兵庫県生まれ。東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻芸術環境創造修了、パリ第1大学（パンテオン＝ソルボンヌ）修士課程修了。地域住民や他分野の人たちと協働するアートプロジェクトや文化政策に関心を持ち、2016年よりTURNに携わる。

身体表現を通した交流の記録映像。「森山開次×リサイクル洗びんセンター」（2016年）撮影・編集：冨田了平

アーティストの言葉 ―― TURNの先を見つめて

五十嵐靖晃の寄稿より

青く澄んだ四角い海を泳ぐ2匹の鯛 ―― 五十嵐靖晃［アーティスト］

TURNの話を最初にいただいたのは2015年になります。あれから7年が経とうとする今、私にとってTURNとはいったいなんだったのかを一度振り返ってみようと思います。

実はTURNの話をいただいた時、最初に頭に思い浮かんだのは、私のいとこの「ユキちゃん」のことでした。ユキちゃんは3つ年上のお姉ちゃんで、ダウン症です。子供の頃、夏休みになると母の静岡の実家に親戚が集い、子供たちはみんな一緒に川で泳いだり、虫を捕ったり、花火をしたり、毎日楽しく遊んで過ごしました。物心がつく前の小さな頃から一緒だったので、特に彼女がダウン症であることを意識することもなく、私は育ちました。

ですが小学校へ行くようになって、障害者と距離を置く同級生や先生、広くは社会の振る舞いに同調するかのように、自分もどこかユキちゃんとの距離を置くようになっていきました。それは仲間外れにされないように自分を守るための選択だったのだと振り返りますが、いとこのお姉ちゃんであるユキちゃんを「自分とは違う人」「分からない人」といった存在として見ようとすることに違和感を覚えました。この時、心の中に生まれたモヤモヤがその後もずっと自分の中にあり続けたのでした。

私はこれまでTURNの活動を通じて東京、ブラジル、ペルーの福祉施設に通う自閉症やダウン症、知的障害のある方たちと交流をしてきました。彼らと過ごす時間は、自分の中では、どこか子供の頃にユキちゃんと過ごした時間を取り戻すようなところがあり、社会の目に怯えて縮こまってしまった自分の心を解放し、本来あるべき自分に立ち返る機会となりました。

私にとってこのプロジェクトはまさにTURN。再び元の場所に帰り着くためのTURNだったのです。私が子供の頃に抱えたモヤモヤは、今はもうありません。

では、TURNの現場はアーティストである自分にとって子供の頃の夏休みのような、ただ楽しい毎日だったのか？と問われると、むしろそれは逆で、国内外で経験した他のアートプロジェクトの現場と比べても非常にタフな部類のものでした。

アーティストとしてその土地やコミュニティに入り、地域の人との対話や、彼らの表情から様々な要素を読み取り、徐々に関係性を育てながらプロジェクトを展開していく自分

にとって、普段のやり方が通用しないことに最初はストレスを感じました。しかしこういった状況は、これまでの自分の常識を捨て、新しいコミュニケーションスタイルを手に入れる、更には新しくモノやヒト、広くはこの世界と出会い直す貴重なチャンスでもあります。と、言葉でいうのは簡単ですが、これまでの自分を一度解体してみるというのは非常にタフなプロセスで、ＴＵＲＮに関わったアーティストたちの多くは、このようなある種の洗礼を受け、新たな眼差しを手に入れたのではないでしょうか。

—

以下に記すいくつかの言葉は、交流先の現場で彼らとつながろうとする過程で、自分の中から出てきた言葉です。

—

「ＰＩＰＡ（ピッパ）（サンパウロの自閉症児療育施設）に来てから『走ってつながっている』と思っていたが、それはこちらの勝手な思い込みだったのかもしれない」

—

「本当の気持ちは分からない。でも気持ちを言葉にできている人の本当の気持ちも実のところは分からない」

—

「でも、結局、自閉症に限らず、他人のことは分からないのだ。これまでは分かった気になりたかったのかもしれない。でも、『分からない』ことが分かった。言葉を使わない彼らと過ごして、他者を理解しようとするのではなく、どう向き合うかがとても大事なのだと思った」

—

これらの言葉から、勝手に彼らと距離を置いている自分の葛藤が伺えます。今思えば、そもそもつながろうとすること、理解しようとすること自体がおかしな話で、障害があろうとなかろうと、誰とだって距離や違いはありますし、自分の勝手な思い込みで相手を理解した気になって安心したいだけで、本質的には他者を理解することなど我々にはできないのです。でもだからこそ想像すること、相手を思いやることができるのです。

「違い」や「分からない」ことを怖がるのではなく、尊重し楽しむことができるか、それらを恐怖と捉え、それに打ち勝てるかどうかは本人次第ということをこの現場で学びました。そういった意味ではＴＵＲＮは心を鍛える機会でもありました。

最後に、私がＴＵＲＮの現場でのプロセスの中で手に入れた眼差しであり、これから生きていく中で大切にしていきたい、自分から出てきた一番気に入っている言葉を紹介します。

—

「人の心は変化する。人の数だけ世界があるのではなく、人の心の数だけ世界がある。心が変わることで、世界の捉え方が変わり、そして世界も変わっていくのだろう。今日、自分が捉えるこの世界は少し変わったような気がした」

この言葉を交流先の施設で出会った友人たちとユキちゃんに贈ります。

—

人には、自分には、何が大切なのか？　私はＴＵＲＮを通じて、自分に帰る、人間らしさに立ち返ることができたのだと実感しています。

久々にユキちゃんに電話をすると「やっちゃん！　元気にしてた？　ヒロくんは？　リエちゃんは？　たみ子おばちゃんは？　家族のみんなはどうしてる？」「やっちゃん、またあれして遊ぼうよ、絵しりとり。またみんなで遊びにおいで」とあの頃と同じように話してくれます。

変わったのは自分で、また戻ったのも自分。

これが私のＴＵＲＮです。これからも東京の施設を中心に交流を続けていきます。

—

いがらし・やすあき

—

１９７８年千葉県生まれ。２００５年東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。２００５年に日本からミクロネシアまで約４０００㎞をヨットで航海した経験から「海からの視座」を活動の根底としている。

—

【ＴＵＲＮでの活動】初年度より「クラフト工房La Mano」と交流を重ね、「ＴＵＲＮフェス」で活動を紹介するとともに、２０１７年より「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」で「手のプロジェクト」を開始。「手」にまつわる行為や所作、表現に着目し、一般の参加者とともに一から畑を耕し、綿づくりのプロセスを通して、様々なコミュニケーションの時間を生み出してきた。また、２０１６年は「TURN in BRAZIL」に参加し、サンパウロにある自閉症児療育施設「ピッパ」に通う。２０１７年には「TURN in BIENALSUR」の一環としてペルー・リマの自閉症・知的障害者通所施設「セリート・アスール」での交流プログラムを行った。

実は今、別のプロジェクトで長崎県五島列島の奈留島（なるしま）の田岸地区にある小さな港でこの文章を書いています。誰もいない静かな港の青く澄んだ四角い海を、２匹の大きな鯛が付かず離れず泳いでいます。あぁ、これでいいんだなと……。

２０２１年11月11日

物語ること ―― 伊勢克也［アーティスト］

75歳のSちゃん。彼女は僕が学生の頃住んでいた街にあった小さなレストランの「看板おばあちゃん」だ。お店が終わった後、たまにハモニカを吹いてくれた。恥ずかしそうに入れ歯を外してハモニカを口にあてる。演奏はゆっくりと丁寧に。得意な曲は『ふるさと』だった。

数曲の演奏を終えると、その後Sちゃんの「お話し」が始まる。まずは自分が子供の頃の話から。養子に出され早くに母親と離れ離れになったこと。実はこのハモニカはその母親からもらった形見の品だった。八百屋の旦那に嫁いで辛いこともたくさんあったけど、そんな時はひとりでそっとハモニカを吹くのよ……。話している間、しわくちゃの表情豊かな顔が僕の酒の肴だった。

横にいる娘にところどころ突っ込まれていたので、どこまで本当かどうかわからないけど、いずれにせよ見事なストーリーテラーであり素敵な「語り手」であった。

そんなSちゃんは筆まめでよく手紙をくれた。その手紙には必ずひとつふたつ短歌が添えられていた。いつの春だったか、大学の卒業制作展を観てみたいというので上野へデートに誘った。その時のお礼の手紙にも数首の歌が。

孫のやうなる若者とデートの日なり
いつになくエレガードなど使いおり

芸大への通学路なりしと云う彼と
雨の晴れ間を歩みゆく谷中の墓地

ハイヤーの運転手が昼寝してをり巾広く
桜並木のある谷中の墓地

教室へビールを配達せしといふ酒屋の
主人（あるじ）とゆき会へり本郷通りに

芸大卒展会場は若者らの静かなる渦
彼立ち止まれば我もとまれり

我が前に鶯汁粉（うぐいすしるこ）彼はビール
最合（もあい）に喰ぶるおでんひと皿

この6首の短歌であの日がひとつの物語として定着されている。

実は35年ぶりにこの6首の短歌が添えられた手紙を読み返してみたのだが。驚くほどにあの日が蘇ってきた。僕の記憶の中では視覚の端っこでしかなかったものを、Sちゃんの視線や心に留め置かれたモノで出来上がった歌は、その場面を見たもうひとつのカメラとしてあの日あの時を写し撮ってくれていた。6首の短歌の時間の流れの速度の変化や、それぞれの歌の中のものの見え方の「寄り引き」で映像的に見えてきさえする。

―

さて、いきなり自分の「思い出話」なんてお恥ずかしいのだが。ここのところ「話し」や「語り」が気になってしょうがない。それは僕がTURNで交流を続けている「西荻ふれあいの家」での利用者とのやりとりの中で徐々に大きくなってきた。

高齢者向けのデイサービスを提供している施設なので、利用者はだいたい70～100歳前後。たまに遊びに行っては一緒にその日のイベントに参加して交流を進めてきた。一度行くと3時間くらいはいるのだが、合間合間に利用者のみなさんのお喋りの輪に入れてもらう。その時間の楽しさたるや。

お喋りは時空を超えてあっちこっち飛び回る。生まれた故郷の話、友達の話、西荻に移り住んできた頃の話、と思うと疎開の話、満洲での生活、途中に冷やかしや突っ込みも入り、旦那の自慢や愚痴までも。70年の時間なんかひとっ飛びだ。

また、ふとした瞬間に始まるひとり語りが心地よい。「○○さんって生まれはどこ？」っていうちょっとした問いかけから「麻布十番でさ、お袋は鍋島のお姫様だったんだよ。戦争の時はさ、増上寺が空襲で燃えちゃってさ、そりゃあ何か悲しかったねえ。見ててさ涙が出てくんの、でさ、その後さ、家は乃木坂に引っ越してさ、その土地が三角でさあ……」。これもまた思い出すまま、とりとめもなく時代を前後し面白おかしく続いていく。「戦争も終わってね、外国の映画とか観るようになって、こんな田舎でグズグズしてちゃいけないって、東京に出たのよ。そ、ひとりで。看護婦の資格を持っていたからね、働けたの。そして主人と出会って、娘が二人……」

ひとり語りの間、僕は語り部の顔や手の仕草を眺めながら適当に相槌を打つ。年配の方の肌はとても味わいがある。ちょっと粉を打ったような乾いた質感、少し弛んでいてそれが表情を穏やかに豊かにする。髪の毛も白味をおびて、ちょっと差した紅や品のよいアクセサリーがとてもよい。

ものをよく見ることは僕の大切にしていることのひとつで、それは僕にできる唯一のことなのかもしれない。自分の「物語」を語っている利用者の方を見ていると、今僕に語っていることはご自身への語りかけでもあるのかな、と思うことがある。ふと遠くを見たり、小首を傾げたり。「そうよね～」と誰かへの相槌ともつかない言葉、少し目を閉じたり、指が虚空に何かを描いたり。そこには老境にあって、そこで何かを物語ろうとする人間がいる。

いろいろな出来事に出会った時に自らに問いかけて、そのうえで乗り越えたり、遠回りして避けたり、そんな時間を経てきた大人が語ると「思い出話」は「物語」へ変質していく

のかな。そうだよね、半端者の「思い出話」ほどつまらないものはないもの。

いせ・かつや

１９６０年岩手県生まれ。自然、人工物、メディア空間等様々な環境で発生し存在するモノやイメージが形づくる形態をテーマに、個展やワークショップを国内外で開催している。女子美術大学短期大学部教授、デザインコースメディア担当。

【ＴＵＲＮでの活動】２０１７年度より「ＴＵＲＮ交流プログラム」に参加。西荻窪にある高齢者在宅サービスセンター「桃三ふれあいの家（２０２１年７月からは西荻ふれあいの家）」の利用者と交流し、俳句や編み物、絵手紙などの活動を通して対話を重ねている。「ＴＵＲＮフェス４～６」に参加。「第６回、第15回ＴＵＲＮミーティング」に登壇。

「地面」好きが、ＴＵＲＮという「海」を泳ぐ ―― 岩田とも子［アーティスト］

「目には見えない静かな海に浸かりいつの間にか紙を片手に地面に立っている」

言葉の海や時間の海。ＴＵＲＮに参加しはじめたころに感じたのは、そんな海の中を気持ちよく漂うような感覚だった。はじめは沼のようなものではないかと恐る恐る近づいてみたところ、それはもっと心地のよいものだったのだ。

そういった感覚的な海の話ではないが、私は子供のころから実際の海があまり好きではなかった。果てしなく広がっているところが怖くてなるべく関わりたくないと思っていた。だが大人になり、海を身近に感じながら制作をする機会が増えるにつれて怖いもの見たさで海に近づいたりもして、そのドキドキ感もよい刺激になり悪くないなぁと思いはじめていた。ただ、思い切り近づいたり、自ら飛び込んだりはせずにいた。

比べて、私は地面の上が好きだ。地面に対して感じる魅力を発端とし、アーティストとしての活動をすることも多い。地球の引力によって当たり前のように地面の上にいるわけだが、そこには「私はここにいていいんだな」という安心感がある。地面から生える植物や周囲を飛び回る虫などの生き物に対する興味もきりがない。知れば知るほど面白く、これもこれで海の果てしなさにも近いかもしれないが、立ち止まりたければ地面に座ったり、寝転んだりするように立ち止まればいいし、やっぱり地面のほうが断然好きだ。

しかし、ＴＵＲＮに関わるようになって、私は海のことを勘違いしていたことに気がついた。相変わらず怖いことに変わりはないのだけど、ＴＵＲＮを通じて関わった人々や土地と出会ったときの感覚は地面の上に立っている感覚とは違い、「海の中を泳ぐ」感じに似ている。身を委ねその場の空気に揺られてみたりする感じ。そんな海の上に浮かんでいたのは様々な要素であった。

アルゼンチンの「カミノス」では挨拶くらいしか現地の言葉がわからない私に、あたかも通じると思っているかのように延々と話しかけてきた彼らの母国語スペイン語。日本で最初に交流を行った「富士清掃サービス」では公園を清掃するときに共有したルーティンやルール。特別養護老人ホーム「グランアークみづほ」では人々の心の中に残るかつての町の記憶。最後の交流先となった「ハーモニー・プリスクール・インターナショナル」では会えない環境が生んだ近くと遠くの曖昧さ。漂うものたちは、時に私を気持ちよく浮遊させてく

れたり、溺れぬよう浮き輪のように補助してくれたりした。

—

そんな海を浮遊する中、私が自ずと手にするようになったものがある。それは紙だ。以前から身近な素材として用いてきた紙だったが、ＴＵＲＮの中でその紙の持つ神秘性や柔軟性により深く魅力を感じるようになった。特に大きな影響を受けたのは最初の交流でアルゼンチンに携えて行くこととなった「折形（おりかた）」だ。「折形」は真っ白な紙を用いてお供えや贈りものを包む日本の伝統的な礼法で、伝え手として研修を実施してくださった長田（おさだ）なお氏を通じて、四角い紙の中に天の理を宿してしまうような神秘性に触れ、紙を手にするときの程よい緊張感を味わうことで、各地での交流をより豊かなものにした。

気持ちを込めて折ったり、想像を膨らませるコラージュの素材として切ったり貼ったり、紙をくしゃくしゃにすることで交流中の会話も弾んだ。会えない状況で共有できなかったものを印刷して、それを交換可能にしたのも紙だ。紙の持つシンプルさと馴染みやすさはどの交流先でもちょっとした静かな時間を作ってくれていたように思う。感覚的な海に静けさを感じたのは紙のおかげかもしれない。

そんな交流を経て、私が立っているのはやっぱり地面の上だ。ひたすら地面の上にいるだけではなく海に身を委ねるような時間も楽しめるようになったのは、ＴＵＲＮによる変化だと思う。なんだか海水でびしょ濡れになって片手に紙を持ち地面に立っている、今はそんな気分だ。

これからＴＵＲＮしたくなるとき、気づいたらＴＵＲＮしているときなんていうのがあるかもしれない。そしてＴＵＲＮせざるを得ないときというのも必ずやってくる。そんなとき、私はどんな海に出会うのだろう。やっぱり怖いようで楽しみでもある。

—

いわた・ともこ

—

１９８３年神奈川県生まれ。身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。２０１２年の畑を舞台に展開した「SILENT MIXER」、２０１４年の「粟島自然観察船」等のほか、自然学校の講師と共同で森の中で子供ワークショップを定期的に行う。

—

【ＴＵＲＮでの活動】２０１７年にアルゼンチンの「TURN in BIENALSUR」に参加、知的障害者支援施設「カミノス」と交流する。帰国後、公園清掃を行う「富士清掃サービス」と「ＴＵＲＮ交流プログラム」をはじめ、利用者とコラージュを制作した。その後、２０１９年より特別養護老人ホーム「グランアークみづほ」、２０２０年より多国籍の子供たちが通うインターナショナルな保育園「ハーモニー・プリスクール・インターナショナル」と、地面をテーマに交流を実施。こうした交流の経験を通して、「ＴＵＲＮフェス４〜６」で作品を展開した。

歌と世界 —— 永岡大輔［アーティスト］

——

例えば、あなたが友達の前でうたを歌うとして、どんなことを大事にしますか？　あるいは気にしますか？

何を歌うかということですか？　上手に歌うことですか？　または間違えないで歌うことですか？

—

障害者福祉センターの「はぁとぴあ原宿」に通い始めた時でした。参加する教室で音楽の活動となり、先生のピアノにあわせて利用者さんと楽器を演奏します。

そのあと、みんなが大好きなカラオケの時間。カラオケといっても、先生が伴奏をしてくれるとても贅沢なものです。「誰が最初に歌いますか？」と先生が聞くと、誰よりも大きく素早く手をあげた方がいました。リクエストの曲名を先生に伝えると、彼はマイクを手にみんなの前に立ちます。イントロが終わるタイミングで、先生が「さん、はいっ！」と合図。ところが、彼は全然歌いません。むしろ微動だにしない。先生は演奏を止めません。

「なんで歌わないのだろう？」と思いながら、僕はその不思議な光景を眺めていました。まもなく、とても大切なことに気がつきました。彼は歌っていたのです。ただ、動かずに声を出さないだけです。良く知る「歌う」という行為とは違うのですが、歌っていることが彼を見ていると十分すぎるほど伝わってくるのです。そしてその歌を彼がとても好きであることが良くわかるのです。

自分の世界が一瞬にして溶解してしまうような、新しくなるような体験でした。

ＴＵＲＮでは「交流」という訪問先の施設に受け入れてもらい活動ができることで、日常の中では当たり前と思うことや、すっかり固定化されて見えなくなってしまっていることに気がつくことがあります。思いもよらない膨らみと出会いがあります。

—

「世界が変わる」というと、まさに今私たちが経験しているコロナ禍のように、大きな出来事によって行動や認識が変わり、制度やシステムが変更されることによって社会そのものが変容していくようなドラスティックなイメージを持ってしまいます。ただ、ＴＵＲＮでの経験の中で、それだけではないかも知れないと思うようになりました。

世界が新しく変わるために重要なことは、「自分の中の世界を変える」こと。「自分の世界の引っ越し」のことなのだと。そしてこの機会は、これまでアートが得意としてきた

非日常にのみあるのではなく、特別な人たちによってなされるものでもなく、僕たちが生活している場所にこそあるのだと思います。みんなが等しく始められるのです。

これまで続いてきたＴＵＲＮの事業はひと区切りですが、これからも自発的な活動としてのＴＵＲＮを、自分なりに小さく弱くとも実践して行きたいと思っています。この活動の中で得られた確かな意思は、僕にとってとても大事なものなのです。

―

ながおか・だいすけ

―

１９７３年山形県生まれ。Wimbledon School of Art修士修了後、国内外にて個展・グループ展による発表多数。記憶と身体との関係性を見つめ続けながら、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングや、映像作品を制作する。現在では、新しい建築的ドローイングのプロジェクト「球体の家」に取り組むなど、様々な表現活動を展開している。

―

【ＴＵＲＮでの活動】　２０１６年より大田区にあるコミュニティ八百屋「気まぐれ八百屋だんだん」と交流を開始、２０１７年より「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」を展開。普段あまり見かけない仕事や生き方をしている〝おとな〟に話を聞く「おとな図鑑」や、店舗の外壁に地域の子供たちと一緒に絵を描く「だんだんＨＥＫＩＧＡプロジェクト」を行う。同時に、２０１９年より原宿にある渋谷区障害者福祉センター「はぁとぴあ原宿」と交流を開始。屋上に生えている雑草に着目し、施設利用者（メンバー）と採取した雑草の標本づくりやスケッチを行ったり、オンラインを通じてメンバーが参加者の似顔絵を描く活動を展開。「ＴＵＲＮ ＬＡＮＤ」や交流の中で生まれた作品を「ＴＵＲＮフェス」で展示した。また２０１７年に「TURN in BIENALSUR」に参加し、アルゼンチンの特別支援学校に通う子供たちと交流を行った。

編集後記

本書の制作にあたり、ＴＵＲＮの変遷を辿るために様々な資料に目を通していくと、この７年間、実に多彩な人たちとの出会いとともに、一人ひとりの思いや期待、それぞれ異なる協働によって、今のＴＵＲＮが構築されてきたことに改めて感じ入り、胸が熱くなる日々となりました。これまで活動を共にしてくださった関係者の皆様、そしてＴＵＲＮの意義に賛同し、後世に伝える記録として、膨大で複雑な本書のまとめに尽力いただいた編集者やデザイナーをはじめとする関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

今回実施した対談や座談会、寄稿からも、新たな気づきがたくさんありました。活動への携わり方やそこから生まれる喜びや悩みなどを、関係者同士が共有することで、ＴＵＲＮの意義を改めて確認し合う機会にもなりました。それぞれの知見や蓄積してきた経験値を共有できる今だからこそ、これからも協働できること、そして次なる展開の可能性を実感することができました。

「出会い」を経験していくと、未知なる世界がたくさんあることに気づかされます。ＴＵＲＮのキーワードとして掲げてきた「多様性のある社会」の姿をこれからも追求していくにあたり、どのような出会いを重ねていけばよいのでしょうか。物理的な出会いのみならず、「想像」に大きなヒントがあるようにも思います。

アラスカの大自然に生きる動物や人々を撮影し続けた探検家の星野道夫氏は、「生物の多様性」と「人の暮らしの多様性」が、人が生きていくうえで大切だと記しています。（星野道夫『魔法の言葉―自然と旅を語る』文春文庫、２０１０年、p.115）。

星野氏は、いろいろな生物が生きている多様性と、様々な価値観で生きている、あるいは様々な土地で生きている、人の暮らしの多様性を知ることで、少し違った角度で自身を見られることを語っています。そして「オオカミが一匹もいなくなった世界と、実際に見ることはできないけれどもどこかに確実にオオカミがいる世界というのは、全然違うことなんです」と述べているように、実際に会うことがなくても、想像することで広がる世界認識の大切さも示唆しています。

ＴＵＲＮの活動のなかだけでも多くの人々の存在があり、実際に出会えた人は限られているかもしれません。ただ、直接的に関係していなくても、様々な形で異なる他者がいるということを知るだけで、自身が認識していた社会の多様さとその奥行きがグッと広がるような気がしています。

（畑まりあ）

［写真クレジット］

池ノ谷侑花（ゆかい）── p.12上, p.13上
伊藤友二 ──── p.23下, p.28, p.31, p.97上中
おおかわらあさ子 ── p.51上, p.105
小野奈那子 ──── p.67－74
加藤 甫 ──── p.43, p.62, p.110
金川晋吾 ──── p.41, p.78, p.87, p.100, p.107, p.108, p.114
川瀬一絵 ──── p.95左
川島彩水 ──── p.26下
工藤由夏 ──── p.52上
鈴木竜一朗 ──── p.46, p.52下, p.56, p.112, p.113, p.118
ただ（ゆかい）──── p.11下, p.91
冨田了平 ──── p.13下, p.14上, p.19, p.23上, p.24上（映像から抜粋）下, p.25,
p.26上, p.33, p.34, p.39, p.53, p.54, p.58, p.97下, p.103
野口翔平 ──── p.106
Ding Musa ──── p.130
UNTREF MEDIA ── p.48

※クレジットのないものは、スタッフ関係者ほか提供。

TURN

主催＝東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京／
特定非営利活動法人 Art's Embrace ／国立大学法人東京芸術大学

監修＝日比野克彦［アーティスト／東京藝術大学美術学部長・先端芸術表現科教授］

プロジェクトディレクター＝森 司［アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長］

TURN JOURNAL SPRING 2022 ― ISSUE 08

2022年 2月16日 発行

監　修＝森 司［アーツカウンシル東京］

編　集＝永峰美佳
菊地七海
畑まりあ［アーツカウンシル東京］
田村悠貴［特定非営利活動法人 Art's Embrace］

デザイン＝星野哲也

印　刷＝三永印刷株式会社

発　行＝公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
TEL. 03-6256-8435 ／ FAX. 03-6256-8829

©2022 Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan
Foundation for History and Culture
All rights reserved

TURN公式ウェブサイト　turn-project.com